

過ちの刃

千年坂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平穏な日々が流れる私立英ヶ野女學校。山形県にあるそのガーデンでは、未知の敵——『ヒュージ』に刃向かう人類の最後の希望——『リリイ』の育成を行っていた。

たまに出現するヒュージを倒しながら、高校生としての本業……学業も怠らない。他の地域よりかは比較的安全なこの地域で、とある事件が起こってしまう。

英ヶ野女學校二年生の京極澪は、徐々に事件と混乱に巻き込まれていくのであつた――

目 次

L 0	殺人事件は身近で起きた	1
L 1	手段を選ばないタイプ	4
L 2	お値段なんと……	9
L 3	効率的な会話	14
L 4	茅ノ間唯姫	19
L 5	他人のお金で食べる料理は総じて美味しい	24
L 6	その真意	30
L 7	突き落とします、容赦なく。	35
L 8	牢獄	41
M 9	目撃したこと	46
L 10	突き上げてからブチ落とす	51
L 11	大きいのは	56
L 12	蝕む呪い	61
M 0—1	偏愛	66
L 13	可能性	71
N 14—1	京極濱のようなにか	77
M 14—2	とけない記憶	83

L0 殺人事件は身近で起きた

「生きている」という事実に違和感を抱く

それは、興味をそそられない講義を聞き流している最中。

それは、数少ない友達との他愛もない世間話の最中。

それは
目を瞑り
夢の世界へ入ってしまふまでの物思いの
最中。

込み上げてくる不安は言語化できず、それでも湧き出てくる焦りは留まるところを知らず。

逃れられる結果など存在しないこの世の理は何時誰か見つめても
自明でありながら、その陰をこれでもかと主張する。
——もし、この世界の摂理に抗うつもりがあるのなら。

「ねえ」

— 何?

あなた
の
？

……………はあ？ 急にどうしたのよ」

の本

卷之三

和以

詩經卷之三

「文部省」

「三三三」

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

「かしら」
「でもー！」

「……え？」

「それじゃあ、あなたには消えてもらう」とにするわ、永遠に

【十月一日水曜日午後五時半 英ヶ野女學校第一訓練場入口】

?太陽が姿を消し、垂れこめる雲に覆われた地上は、暗く、それは誰かに見られるのを拒んでいるようだつた。

?その日もまた、七つ下がりの雨が優しく大地を濡らしていた。

?今日、薄い闇と湿気に包まれた私立英ヶ野女學校は、まるで降る雨全てを吸い込んだかのような重苦しい氣が溢れていた――

「勘解由さん、少し、いいですか？」

私——京極澪は気づかれないよう後輩の背後にまわり、表情

から僅かばかりの怪訝を悟らせ、口調にもこれまた僅かな怒氣を孕ませ、前触れもなく話しかけた。

「はつ、はい！ 何でございましょうか、澪様！」

悪くない、いや、これは上出来だ。

話しかけた相手は同じレギオンの後輩——勘解由ななだ。

「先程の訓練、全く身が入つていなかつたみたいだけれど。……」

言葉を繋ぐような素振りを見せて、わざと繫がない。ここで、一切動かず相手の反応を待つ。

「えつ……えつと、その、はい……」

何を、どう言えばいいのだろうか、分からぬ——おそらくそんな感じだろう。

「だから、何故ですか？ 集中力を欠いていた理由です。今後の訓練に支障が出るかもしません。隠すことなく全て話しなさい」

「はあ……えつと、はい。さつき？ 学校の敷地内で殺人事件があつたじやないですか。ちょっと怖いかなうつて、あはは……なんて。澪様は特に怖くないみたいですね……」

初耳だつた。怖いも何も知らないことだもの。しかし、口振り的にみんな知っている事なのだろう。

怖いというのが本当なのか、ただ興味があつただけなのか……そんなことはどうでもいい。

「ええ、そうですね。しかし、いつも通りでないのは貴女だけ。他の皆さんはいつも通り訓練に励んでいましたが？」

知らなかつたということは、決して態度に出さない。

「はい……そうでしたか……？　ごめんなさい……」

やはり、だ。事件があつたということはみんなが知っていることらしい。私だけが知らないということは、テレビなどで報道されているものでもなく、単なる『噂』に過ぎないのだろう。

この学校の誰かが死体でも発見したのか、それとも――

「……反省しなさい。たっぷりと」

数秒の間を取り、顎を引き、一瞬だけ目を瞑めつけ、言葉を発する。

そして、返事を聞く前に、早足でその場から立ち去つた。

L1 手段を選ばないタイプ

【十月二日木曜日午前五時前 学生寮 京極澪の自室】

京極澪の朝は、周りに比べ少しばかり早かった――

下着姿で綺麗な正座をしながら自室の出入口のドアをじつと見つめていたのは私、京極澪である。

時折、左手に持つ携帯電話に目線を移しながら、ある“モノ”が届くのを待ち構えていた。

持つていてる携帯電話は入学前に両親から買つてもらつたものだ。元々はライトピンク一色であつたが、その塗装は既に一部剥がれ、鈍い銀色が顔を覗かせている。

(あと一分……)

待つだけの時間というのはやたらと長いもので、携帯をチラチラ見る回数も、意図せず増えてしまう。

待つことは嫌いではないが、やはり焦れつたいし落ち着かない。

(あと一分……)

ご飯を食べているときの六十秒と、何もせず待つているときの六十秒。何故こんなにも、体感時間が違うとだろう……？

ふと、そんなことを考えていた。もつとも、結論が出ることはなかつたが。

そして――

(来た……!)

扉についているポストから、私が待ちかねていたソレが、バサツと音を立てて部屋の床に舞い降りた。

『週間英ヶ野新聞』

それは、英ヶ野女學校新聞部が発行している、学校内外のニュースを集めた新聞である。

火曜の朝、配達を希望する生徒の部屋に届けられるものなのだが――

なんと私の部屋は、学生寮二年棟の入口に一番近い場所だ。

しかも、新聞は二年棟、一年棟、三年棟の順番に配られるようになつ

ている。つまりこの部屋は、学校内で最も早く新聞を手にすることができる場所——ということであつた。

(三学年になつても部屋を変えないように頼んでみようかな……)

そんなことを考えながら、床にボトッと落ちた新聞を取り、二段ベッドの上の階にあがる。

置いてあるのは二段ベッドだが、実はこの部屋にルームメイトは居ない。

基本は二人一部屋の学生寮であるが、何故か私だけは一人だつた。学校の首席様になつたから特別にアメニティ溢れる個室にしてくれたのか、それとも、同室希望の用紙の提出をワザとすっぽかしたからなのか……

個室になつた理由はともあれ、入学から一年の時を経て「英ヶ野の孤高のリリイ」という称号を得てしまつたことは事実である——そうしてベッドの上に寝そべり、枕を覆うように新聞を広げた。

(今日の記事は何かな……)

広げた新聞の見出しを確認する。

『英ヶ野の誇る孤高のリリイ 単騎で大山ケイブを制圧』

——それは、自分の記事だつた。

『九月三十日の午後七時、大山の山の麓にケイブが発生。大山から辻興屋^{つじこうや}の平野にかけてスマール級ヒュージが多数来襲。ほとんどのリリイが学生寮におり咄嗟の出撃ができない中、唯一その場に居合わせた京極澪(17)がケイブの制圧、人命救助を一人で行つた。ヒュージによる被害は農作物のみであり、人的被害は奇跡的にゼロとなつた。連絡が入り遅れて出動した我が校の生徒12人が撃ち漏らしのヒュージを殲滅、民間人の移動などの後始末を行つた。これにて我が校の累計ヒュージ討伐数は12450体となつた。』

(ああ、のことか……)

つい二日前の出来事だ。

夜遅い時間ではあつたが、そのとき澪は湯野浜まで温泉に入りに行

く途中であった。

自前の洗料、タオル、着替え、それと木製の桶が入つたりユックに、
C_{チヤー}H_アR_ムMを両腕に抱えて長い距離を歩いていた。そこでたまたま、
ケイブと多数のヒュージの発生を目撃、そのまま制圧したのである。
しかし、目的地だった温泉の閉館時間は午後九時、当然間に合わなくなってしまったのだ。

(あつ……そういえば、惜しかったな、温泉……)

あの時温泉に入ることは叶わなかつた。それも仕方の無いことだと分かつてはいるつもりであるが、やはり割り切れないものはある。
(私はヒュージを倒す為に数時間歩いたんじゃない、温泉のために歩いたのに――)

そう思い返すと、だんだん腹の奥からモヤモヤが募つてくる。
(見なかつたことにして温泉に行けば良かつたかな……でも、まあ仕方ないか)

一人でケイブの制圧、という大きい功績をあげた。温泉に入れなかつたのは悔しいが、その分たくさんの人々に感謝された。

(温泉は……そう、そうだ、今日また入りに行けばいい)

ふと、そんなことを思いついた。

(どうせなら、ただ温泉に入るだけじゃなく、もつと豪華に。ヒュージに温泉を邪魔されたんだ、今日という今日は心ゆくまで遊び倒してやる……)

そう決めた瞬間『京極湯の豪華一日温泉プラン』が頭の中で構築された。計画を考えている心の中が、次第に晴れやかになつていくのを実感する。

(今から外出届を学校に提出して、最寄りのショッピングセンター発のバスに乗ろう。レギオンのメンバーには……置き手紙でも残しておけばいいか)

今日は講義こそ入っていないが、レギオン内の訓練はいつも通りにある。しかし、ここはレギオンの隊長だ。どうとでもすることは出来るだろう。目的の為なら手段を選ばないタイプなのだ。

(訓練が休みになつて嫌になる人なんていないよね。そうだ、昼ごは

んは外食でもしよう。あとは……海岸の散歩、そして、温泉）

——結局、今日の新聞に載っていた他の内容は、ほとんど頭に入らなかつた。

新聞を手放し、携帯を手に取つて時間を確認する。

『午前五時三十五分』

木曜日以外は、だいたい今起きるくらいの時間。いつもならまだのんびりしている頃ではある……が、今日は違う。

新聞を畳み、携帯と一緒に左手で抱え、ベッドからジャンプで飛び降りた。床からものすごい音がした。

抱えていたモノを机に置くと、クローゼットから制服一式を取り出し、手際よく着衣していった。

そして着替えが終わり、引き出しから黒のボールペンと、いつか提出するハズだった同室希望の用紙を取り出す。いかにも大事な書類とかに使われていそうな分厚い用紙だが、躊躇うこともなく半分に切り裂き、何も書いていない裏側にメモをした。

（用事があるので一日出掛けます。今日の訓練は無しです……つと。こんな感じかな）

メモをササッと書き終え、手際よくリュックに荷物を詰めていく。判断に迷いが無いのは自分の長所だと自覚している。

そして荷物を纏めあげ、さっそく外に出ようと腰を上げ——ふと、机に置いてあつた新聞が目に入った。

『“呪いのスポット”で、今度は殺人事件か』

（殺人事件……？ そういえば、勘解由さんがそんなことを言つていたような……でも、呪いのスポットつて……？）

『十月一日の正午、教導官と生徒数名が例の呪いのスポットにて死体を発見、その場で学校に通報。一時辺りは騒然となつた。死体は英ヶ野女學校在籍の生徒で、胸にはCHARMでの攻撃と見られる大きな刺し傷があつたという。』

（いや、だから呪いのスポットつて何……）

呪いのスポットの正体は分からなかつたが、勘解由さんが言つていた殺人事件というのには本当にあつたらしい。

気にして仕方がない、と開いていた新聞を閉じて顔を上げた。

（あつ、携帯も置きっぱなしだった……）

手に取った携帯も一緒にリュックに仕舞い込み、すっと立ち上がる。

今日は思いつきり遊ぶぞ――――！

そう意気込み、靴を履き、扉を開け、外出届を手に持ち校舎へと向かつた。

空は明るくなりはじめ、晴れやかな天球には雲の一点も見られなかつた。

――受付窓口は閉まっていた。

L2 お値段なんと……

【十月一日木曜日午前七時十五分 ショッピングモール内バス待合室】

結局、受付窓口が開くまで待つことにしたのだった。確かに、あんな時間に空いているはずは無かつたな、と、今更ながら思い返す。

その後は一旦誰も居ないレギオン控室に行き、レギオンメンバーに宛てた手紙を置き、少しだけ時間を潰して受付窓口へ向かったのだった。

そこからはこのショッピングモールまで歩き、そして今、湯野浜を通るバスを待っているところだ。

本日の空は日本晴れ、朝から少し汗をかく程度には暑かつたが、待合室は冷房がバリバリ働いているせいで、少しばかり肌寒い。

私が座っているところから見て右奥の壁には、大きな薄型テレビがついていた。そこでは朝の子供向け番組『リリイとあそぼ』が放送されていた。

誰に見られるということなくただ垂れ流されているだけのそれを見て、寂しそうだな——と心の中で呟いた。

「何が寂しそうなんですか？」

突然、真後ろから声がした。聞いたことのある、不自然に明るい声だつた。

「茅ノ間さん、何故ここにいるのですか？」

茅ノ間唯姫

——同じレギオンの一年生である。代替わりの四月から、約六ヶ月ぐらいの付き合いだ。突然話しかけられたことには少し驚いたが、いつも通り口先だけで応える。

「あれ？ 言つてませんでしたつけ？ 私、バス通なんですよ。澪様

こそ、なんで此処にいるんですか？ で、何が寂しそうなんですか？」
言われてみて思い出す。確か彼女は、学生寮ではなく自宅からの登

校だった。何でも両親の面倒をみなければいけないらしい。学生寮に部屋を借りてはいるものの、物置きにしか使っていないとか。

「そうでしたか。控室にも書き置きましたが、今日の訓練は無しにします。思う存分休みなさい」

そう応えると同時に、今から乗る予定のバスが到着したのが目に入った。

「えっ、やつた！嬉しいです！ ところで、澪様は何で学校に居ないんですか？ 何処に行くんですか？ 何が寂しそうなんですか？」

唯姫の言葉を聞き流し、斯と椅子から立ち上がり――

「では、私はこれで。皆さんによろしくお願ひしますね、茅ノ間さん」

「…………」

一切の見向きもしないまま、待合室を後にした。

「これで」

私が左手に持っているのはリリィバスポート――通称『リリパス』である。

リリパスとは国が発行している、リリィであることを証明するカードだ。リリパスには『白のリリパス』『赤のリリパス』『金のリリパス』の三種類があり、一定以上の功績に応じた色のリリパスの発行申請権を得られる仕組みだ。

私が所有しているのは『金のリリパス』である。すなわち、最上級のリリパスだ。

金のリリパスともなると、鎌倉府五大ガーデンクラスのリリィが持つようなもので、英ヶ野女學校でこれを所有しているのは私、京極澪ただ一人だ。

リリパスをバスの運転手に手渡し、運転席の左側についている機械にピッとしてもらう。

すると、料金なんと十割引。

(ああ、なんて便利なんだろう)

すました顔でリリパスを受け取り、一礼して奥の座席へと足を進める。そして窓側の席に腰を下ろし、そのままふうつと一息ついた。

(やつぱり唯姫さん、苦手だな……)

席につき、ふと先程の会話を思い返す。彼女と会話をしていても、どうもこちらのペースを持ち込めている気がしない。

自分自身、会話の主導権を握る方法は心得ているつもりではあるし、感情を読み取る能力にも自信がある。

それなのに――

(話していくて違和感しか感じない……これは絶対に気の所為じやない。何か唯姫さんにおかしい点があるはず)

違和感の正体は全くの不明だし、周りから見れば何もおかしいところなんて無いのかも知れない。

(まあ、気の所為ならばそれが一番いいのだけれど)
気にしていても仕方ない……と、これ以上のことは振り返らなかつた。

幾人かを乗せたバスは街道を進んで行く。

こちらの街並みは、昔からずつと変わつていないらしい。ヒュージによる被害は殆ど無いものの、過疎化が進み、現在では空き家もかなり増えているという。

その空き家も、今は引き取り手が無く、冷たい雨と雪に晒されて風化していくのをただ待つだけ。

バスが進むにつれて田んぼが多くなり、やがて集落がポツポツと生えていくだけとなつてくる。

そんな風景を感傷に浸りながら――なんてことは全く無く、はやくもつと栄えて欲しい……などと考えながらぼんやり眺めていた。

「――つ！」

突如、バス中にけたたましく警報が鳴り響いた。擬音で表現するな

らば、ジリリリツ……といったところだろうか。

(これは……ヒュージが出てきちゃつたかな)

そう考へてゐるところに車内放送が入る。

『この先にヒュージが出現したとの情報が入りましたので、お客様にはご迷惑をお掛けしますが、しばらくの間停車いたします』

心の中で大きく舌打ちした。

私は舌が器用ではなく掠れた音しか出ないため、実際に舌を打つことは無かつた。

(三日前と同じ場所……撃ち漏らしがいた?)

何にせよ、ヒュージが出現したとあらば倒さなければならない。

すると、中老くらいであろう車掌がこちらに向かってきた。

「すみません、確かありリイの方でしたか? さきのヒュージ、どけて頂いても、よろしいでしょうか?」

汗ポリポリ——といったような表情で、ヒュージの討伐をお願いされた。

あくまでお願いという形であるが、これは義務である。

リリパスを使用するということは、つまりはこういうことだ。

様々な場所でサービスを受けることのできる代わりに、相応の対価——つまりはヒュージが出現した際の討伐義務が発生する。CHARMも常に持ち歩かなければならない。これを破ればリリパスは剥奪、もちろん再発行することも出来ない。リリパスを所持することは信頼関係の証なのだ。

「勿論です。京極澪、ただ今ヒュージの討伐任務に当たらせていただきます」

そう応え、バスから降りる。そして討伐へ向かう前に、車掌から耳打ちされる。

「スマート級が一体、この道の数百メートル先のことでしたよ」

詳しい情報を放送で言わないのは、他の乗客に対する配慮だろう。

小さく頷き、全速力で地を駆けていく。

両手に抱えるCHARMは『シバルバ^{x_i b_a l_b a}』——英ヶ野女學校の

工廠科と提携チャームメーカーが総力を挙げて制作にあたった、一本

限りの超高級品である。

最近流行りの変形機構がついていない大剣型で、主に斬撃をメインとして戦うこととなる。

一見すると何の変哲もない第1世代CHARMのようであるが、これは学校の一大プロジェクトとして開発されたものだ。それなりの『機能』というものが備わっている。

その『機能』というのが、いわゆるオートムードだ。このCHARMは精神と連携して動き、半ば自動で敵を屠ることが可能となつている。

ちなみにこの機能を維持するために、毎月中古車が買える程度のメンテナンス費用が掛かっていると聞かされたことがある。

しかし、これを扱うにも多くのハードルがあつた。

このCHARMを一度起動してしまえば、その後は精神と同調して自動で動いてしまうため、マギ制御が非常に難しいのである。

しかも、第4世代CHARMでの事故によつて意識不明の重体となつてしまつた前例が他地域の有名なガーデンで起こつたという噂もあつた。これも相まつて、莫大な費用をかけながらも使用者のなり手がないこのプロジェクトを批判する声も多かつたという。

代替わり前の三月、一年生ながらにしてこの扱いが難しいCHARMの使い手として選定され、それを承諾したのが私なのだ。
(……さつさと片付けなくちゃ)

全速力で駆けながら、前方右手側の田んぼにヒュージの姿を認識すると同時に、CHARMに引っ張られるようにヒュージ目掛けて静かに突撃していく――

L3 効率的な会話

向かつた田んぼの中心には、スマール級のヒュージ——識別名『オルビオ』が、たつた一体居座っていた。

スマール級と聞いていたが、その大きさがほとんどミドル級のように見えるのは、おそらく氣の所為では無いだろう。

(……相手はこちらに気がついていない。今のうちに——っ!)

背後から最速でCHARMを振るおう————とするのは私ではなく、両手に抱えているCHARM『シバルバー』の判断だ。

「……っ!」

ヒュージとの距離がぐんと詰まり、抱えていたシバルバーを大きく上へと振りかぶる。

接近の気配に反応したヒュージが振り向こうと試みる——が、その姿を目視することも、悲鳴を上げることさえも許さない。

灰色の装甲に包まれた身体は、シバルバーによるその一太刀で、見事に真っ二つに分断された。流出した体液と、割れて倒れた灰色の塊は、やがてマギの残滓となつて螢の光の様に散っていく。まるで見慣れた光景だ。

「ふう……」

少しばかり荒くなつた息を整え、乱れた制服を直し、ゆっくりと足を進める。ヒュージが陣取つていたその足元には、収穫されることなく命を閉じた稻穂たちが横たわっていた。

(ガーデンへの報告は……要らないかな)

休暇をヒュージに邪魔されたことに多少の怒りを覚えていたのかかもしれない。ガーデンへの交戦報告は義務となつているが、どうも行う気にはなれなかつた。

しかし、CHARMの内蔵機構により、討伐したヒュージの数がガーデンに送られる仕組みが存在する。直接の報告と討伐カウントの差異があれば、いざれ報告漏れは発覚するだろう。

(面倒くさいなあ……)

ガーデンへの悪態をつきながら、元いたバスへ歩みを進める。神無月の冷える朝だというのに、制服に包まれるその体は少し汗ばんでいた。

【十月一日木曜日午前八時四十五分 湯野浜海岸】

ショッピングモールの待合室から乗ってきたバスも湯野浜に到着し、気分よく海岸を散策していた時だった。

『ピロリンッ♪ ピロリンッ♪』

背負っていたリュックから、喧嘩やかましい着信のメロディーが聴こえてきた。

ムツ——としながらも携帯を取り出し、呼び出しに応える。着信をかけてきたのは、同じレギオンの一年生である勘解由かげゆななだつた。

「はい、京極澪です」

『もしもし、私です、ななです』

「何の用事でしようか?」

『もう、澪様は今どこにいらっしゃるんですか! 勉強教えてくれるつて約束したじゃないですか!』

「……本校舎にいます」

『……嘘つかないでください。波の音、聴こえますよ』

「気の所為です。それで、何を教えて欲しいのですか?」

『結局今はこっちに居ないんですか? せっかく澪様の部屋の前まで来たというのに……』

『勉強を教えるだけなら電話でも十分でしょう、分からぬところを口頭で伝えてください』

いい気分で歩いていたところに水を刺され、ただただ一方的に腹をたて、機嫌を損ねていた。この時点で既に、まともに勉強を教える気は無かつた。

『えつと……ベクトルの問題なんですけれど――』

ななは、一学年の中でもトップクラスの成績を誇っている。特に数学は得意分野らしく、既に二学年の範囲を先取りして学習していた。

……その勘解由ななに数学を教えている私、京極澪は、英ヶ野女學校では右に出る者が居ないと断言出来る程に数学が得意だ。

『——のとき、体積を求めよ。つていう問題です』

「そう、この問題のどこが分からぬのですか？」

『これつてどうやつて高さを求めるんですか？』

「はあ……勘解由さん、ただの知識不足ですね。底辺が第3成分が0であるベクトル a と b を用いて $a + k c$ と $b + l c$ で定まる平行四辺形なら、今の問題の体積は $\det(a \ b \ c)$ の絶対値です。ガヴァリエリの定理は調べましたか？」

『えつ、えつ……ガヴァア……？』

教えている内容は高校の範囲を大きく逸脱しているが、この位は当然だといって話を進める。教えるのが面倒くさい時の常套手段だ。「これが分からぬのであれば、解く前に自分で証明を確認してください」

『えつ……と……ちよ、ちよつと待つてください!!』

『どうかしましたか？』

『何言つてるのかサッパリです！ 私でも分かるようにお願いします！』

『……』

『それなら、諦めなさい』
『帰つたらまたその時お願ひします！』

『……』

『それと……』

突如、ななは声色を変えて言つた。

『……？』

『明日から学校、休校になるみたいですよ』

『ん？――と、面持ちを神妙にする。

『……詳しく』

『えつと……昨日、殺人事件の話をしたじやないですか』

『ええ、しましたね』

『なんでも、今日から捜査が入るらしいです。外出も出来るだけ控え るようにつて』

「分かりました、報告ありがとうございます」

『いえいえ、澪様どうせ学校からの連絡なんて見ないとおつ——』

——

—— プチツ ——

(なんだか大事おおごとになつてゐるみたい……)

殺人事件というものがどれだけの事態なのか分かつてゐるつもりではいたが、イマイチ危機感が湧かないのもまた事実であった。講義が無くなるのはラッキー——などと考えつつ、これからどう動こうかと考えを巡らせていると——

『——ピロリンツ♪ ピロリンツ♪』

先程閉じてポケットに閉まつた携帯から、再び着信音が鳴り始めた。

「はい、京極澪です」

『それと、もう一つ』

ななの声だつた。

『今日中に、戻つて来るようになつて教導官様が言つてましたよ』

ななの口振りは、明らかにある教導官を真似てゐるようだつた。

「……ですか、分かりましたと伝えておいてください。ところで、その教導官とはどなたですか？」

『頓宮教導官様ですよモチロン』

頓宮教導官——英ヶ野女學校のベテラン教導官だ。名前を頓宮叶愛といい、十年前からここで教導官をしてゐるらしい。発言力がものすごく大きいことから、陰で『権力の鬼』と呼ばれていたりもするが、生徒たちからの人気は高い。

「用事はそれだけですか？」

『はい、ゆつくり休暇をお楽しみく——』

—— プチツ ——

携帯電話を再びリュックに仕舞い込み、止めていた足をゆつくりと

動かしはじめる。

気温は然程落ち込んでいるワケでは無いが、肌に纏わりつくような潮風に体温を奪われる。

「はあ……」

今日は溜息が多い日だ。

(とりあえず、ゆつくり出来る場所でも探そうかな)

幸いなことに、湯野浜には多くの温泉や旅館、更には無料で浸かる足湯などもある。休憩する場所に困ることは無いだろう。

山沿いの国道をずっと進んだところにある加茂には水族館もあるが、今日は歩いてそこまで行く気にはなれない。海産物を楽しむのであれば、その先にある鼠ヶ関ねずがせきが最適だ。しかし、それこそ徒步で行けるような距離では無い。

結局、休憩場所は湯野浜内で探すことにした。

どこかいい場所は無いかと辺りを見渡せば、年季が見て取れる旅館らしき建物がいくつも見受けられる。海沿いの街だからだろう、潮風に当たられて風化、ヒビ割れを起こしている箇所がたくさんある。

そんな古びた建物に入る勇気は無いので、これまでも何度も何度か行ったことのある温泉に寄ろうと決める。

(確かあそこには売店と休憩所もあつたはず……)

過去の記憶を頼りに建物を探す。そして、その建物は意外とあつさり見つかった。

(何か変わっているところはあるかな)

懐かしさを覚えながら自動ドアを潜り、建物の中へと入つていった。

「——あれ、澪様じやないですか」

休憩所に立ち寄ろうとしてみれば、そこには茅ノ間唯姫が居た。

L4 茅ノ間唯姫

目の前に居るのは茅ノ間唯姫――そう、今朝バス停で出会つた、茅ノ間唯姫だ。

「あれ、澪様じやないですか。どうして此処に居るんですか？」

「聞きたいのはこつちだ――――と言いたい気持ちは抑えておく。聞いたら負けた気がしてしまう。」

「多少の休息があつてもいいでしょう、今日はそういう日です」

「私の家がこの近くにあるんですよ。今日から講義が休みらしいですから、荷物だけ持つて戻つてきちゃいました」

(―――つ!)

内心は少し驚いていたが、表情には一切出さない。この程度の反応を予測しておくことは自分でも可能だ。この近く家があるというのも、嘘の可能性が高いように思えるが――――

「そうですか。私はもう少しここでゆっくりしていきますが、茅ノ間さんはどうですか？」

「やだなあ、澪様つたら疑り深いですね。それなら私の家までついて来ますか？」

「……」

(やつぱり――――)この子の今日の行動は、どう考へても普通じやない

唯姫は多分、ワザとこちらに変だと勘づかせるように誘導している。

しかし不思議なのは、今の今まで同じレギオンの仲間として過ごしていく、一切そういった行動は無かつたと記憶している。勿論、変な噂の一つも聞いたことがない。

「……少し私は席を――――

〔――――澪様〕

唯姫は急に声のトーンを落とし、先程の芝居じみた表情から突然、冷たい真顔となつた。

「気をつけた方がいいかも知れません」

瞬間、時が凍つたかのような錯覚に囚われた。

「……っ！」

（これは一体どういう……）

何の警告なのだろうか。そして、この警告にはどんな意図があるのだろうか。良心からの警告なのか、脅しにかかっているのか。今の自分に想像出来ることはあまり無い。あるとすれば、昨日の殺人事件絡みか何かだろう。

「……茅ノ間さん」

「はい！」

普段通りの口調と表情に戻っていた。まるで夢でも見ていたかのような感覚だ。

「休講なのは明日からと聞きましたが？」

「澪様、学校からの連絡読んでないんですか？」

「ええ。休講だというのは勘解由さんから聞きましたが……」

「あー、気を遣つたんじやないですかな？　ほら、澪様そういう情報には疎いみたいですし」

あくまで何事も無かつたかのように会話は続く。情報に疎いというのは間違ってはいないし、訂正する気もない。

「そうですか、教えていただきありがとうございます」

「どういたしまして！」

「…………」

そうして、その後は他愛も無い会話を続け、そろそろ帰ると言つた唯姫を見送った。

（気をつけて……か）

もう少しぐらい説明があつてもいいんじゃないか——とも考えたが、あれも強く印象づける為の手法なのだろうと納得した。

これ程までに手間を掛けた警告。少し悔しい気もするが、気にせずにはいられない。気にしなくていい道理も無い。

(まあ、今氣にしても、分からぬものは分からぬか……)
そう思うことにするも、しばらくはこの出来事が頭から離れないの

であつた――

【十月一日木曜日午前十時四十分 湯野浜 休憩所】

唯姫と話し込んでいたこともあり、だいたい一時間ほど休憩所に居座つていただろうか。目的の温泉には午後六時頃にでも入ろうかと思つてゐるので、まだまだ時間には余裕がある。

つまり――暇だ。

とはいへ、私には先見の明がある。暇になることは見越していたので、数学の教科書を荷物に詰めておいた。

(今日はどこを……あつ、そうだ……)

数学の教科書を手に取り、思い出す。

最近はななどもう一人、レギオンの先輩の為に数学を教えたりもしている。そこで使用する問題を作問してゐる途中だつたのだ。早速続きに取り掛かる。

(うーん、ななのレベルなら、この問題は流石に簡単すぎる。捻りも何もない……)

過去の自分の作問にケチをつける。

(絶対値のついた積分は……教えてないけど、まあ少し考えればできるかな)

英ヶ野の成績学年一位は伊達じやない。その気になれば、聖橋大学にだつて余裕で受かるであろうポテンシヤルがななにはあつた。教え甲斐が有るといふものだ。

(月様にはまずは……基礎の基礎である部分積分を理解してもらわなきやいけないかな)

月様―― 桜月は、同じレギオンの三年生だ。最近になつて、

数学を教えて欲しいと頼み込まれた。三学年のこの時期なので、数Ⅲの方は履修が終わつてゐる筈であるが――ハツキリ言つて、月様はかなり遅れをとつてゐると思う。まあ…… 教え甲斐が有るというものだ。

(極限も同時に教える必要があるかな……複素数平面は、もう諦めてもららうしか……)

こうやつて、相手のレベルに合わせた作問をするのが私、京極灝の趣味の一つだ。

難しいだけの問題を作問するのは好みでは無い。既知の知識に加えて気づきを得させ、発展させる力を伸ばす。これこそが教材開発の意義なのだから。

例えば——トマトが苦手な一人の少女がいたとしよう。その少女のトマト嫌いを治すために、ミニトマトを大量に突き出して無理矢理口の中に詰め込んだりするだろうか。

勿論、そんなことをする人はいないだろう。本当にトマト嫌いを治そうと思つて いるのであれば。

ケチャップやトマトジュース、トマトゼリーなどを段階的に取り入れ、徐々に耐性をつけていくのが一般的である。

中間層向けの学校の教材は、言わばトマトチキンカレーのようなものなのだ。トマトが大好きな人にも、大嫌いな人にも同じものを食べさせる。そして、トマトが苦手な人のトマトに対する嫌悪感は、一生治ることはない。トマトが大好きでトマトしか食べたくない人を、満足させることもない。

……いや、後者については一概にそうとは言えないだろうか。

ともあれ私は、上にも下にもズバ抜けた彼女達の教材開発に努めるのだ。

ちなみに私はケチャップすら喉を通らないため、この方法でトマト嫌いが治ることはない。

(両辺の x に関する微分で、部分積分を用いて $y, -y$ とするところを説明して……)

……

——気がつけば、時刻は十二時半を回っていた。

お腹が悲鳴を上げている音も聴こえる。ああ、今日は朝ご飯を食べ

忘れていた。

集中していたため気が付かなかつたが、携帯には一通のメールも届いていた。

(通知……？ 誰からだろう)

New 11:05 From:月 To:澪

【件名】明日の午後

澪ちゃん！ 明日暇なら遊ぼう！

思わず作問ノートを破り捨てそうになつた。

どうやら月様は、自分の立場を弁えていないうようである。大学受験を控える身で遊ぶなんて……とまで言えば、少しばかり酷かもしけないが。

『駄目です、勉強していくください。』……つと

月様からの誘いを冷淡な文面で一蹴し、手早く荷物を纏め、腰を上げる。

窓から見える外の様子は相変わらずだ。しかし、今の心境の所為であろうか、完全に日が登った空も微かに鈍色に見える。

こんな気分では休暇も楽しめないと、昼ご飯のことを考え奮起を促そうと試みる。

(ここでお昼ご飯を食べるならやつぱり、海鮮かな。お金はいくらでも出せるし豪勢にいきたいけど……)

もう既に、頭の中は海産物でいっぱいだ。美味しい食べ物は心を満たすことが出来る。

度重なる出来事による疲弊を癒すため、気分を上げるようなことを沢山思い浮かべる。そして、それを浮かばせる頭脳に積もつた倦怠は

——明らかに異常事態に気を配ることを拒んでいた。

L5 他人のお金で食べる料理は総じて美味しい

【十月二日木曜日午後一時半 月花亭】
げつかてい

休憩所を出て十数分歩いたところで、良さげな外装の料亭を発見した。提げられた看板には『月花亭』と、達筆な印刷文字で書いてある。沿海部にしては潮風による風化もあまり見受けられないため、比較的新しい建物なのだろう。

期待を大きくして中に入つてみれば、予想通りの綺麗な内装が広がっている。暖かみを感じられる木材の壁に、やわらかな電球の光が館内を優しい雰囲気に纏めあげていた。

「いらっしゃいませ。何名様でいらっしゃいますか？」

「一人で」

来店したとともに、カウンターから出てきた女人が笑顔の接客をしてきた。

「畏まりました、席へご案内致します。少々お待ち下さい」

女人人はそう言い、扉の奥へ入つていった。

店の内装といい店員の態度といい、煌びやかでは無く日本の落ち着いている。とても好印象だ。

「大変お待たせいたしました。奥の個室が空いておりますので、そちらにご案内させていただきます」

上の者か何かと話して来たのだろうか。戻ってきた女人人は深々と一礼し、先導して歩き始めた。周りを見渡しながら後ろについていく。床も綺麗に掃除が行き届いていた。

「こちらの部屋でござります。メニューはこちらとなります、ご注文がお決まりでしたらそちらのベルを押してください。ただいまお冷をお持ちさせていただきます」

案内された個室を見て確信してしまった。

——ここは、絶対に一人で来るべき場所ではない、と。

見た感じでは全席が個室で、その一つ一つに五、六人が座れそうな木造りのテーブルと座布団が置いてある。この部屋も例外ではない。

しかし、一人で来たことを気に負うつもりは微塵も無い。広いスペースを堂々と占めさせていただこう。

気を大きくして差し出されたメニュー表を開く。少し目を通してみただけでも、かなり私好みのラインナップである。少々お値段は張るもの、今日の財布に上限は設けないつもりなので、好きに注文させてもらうとする。

(牡蠣……！ それに、蟹や海老もある！)

ああ、メニューを見ているだけで心が満たされていく。

刺し料理も沢山ある。真鯛やハマチ、ノドグロやカサゴもあるとうではないか。何を注文するべきか非常に悩ましい。

メニューを前に頭をフル回転させる。財布に上限が無いとはいえ、お腹に上限は存在してしまう。それならばやはり、一品で何種類もの海鮮を味わえる海鮮丼を頼むべきか……

そんなことを考えていると、個室の扉に手をかける音が聴こえてきた。どうやらお冷が到着したらしい。

少しメニューから目を離し、顔を上げて扉に目を向けると――

「――お水持つてきましたよ、澪様」

……何かの間違いだろうか。そこには水の入ったコップを二つ手に持つた、茅ノ間唯姫が立っていた。

「……え？」

「あっ、驚いたって顔ですね！ いやー澪様がそんな表情するなんて、私の方がビックリしちゃいそうですよ」

ホラー映画か何かでも見ているんじゃないかとすら思えてしまう。唯姫の顔を見て、少し前の光景が脳裏に蘇る。

「えっと……どうして茅ノ間さんがここに居るのですか？」
「居ちゃダメですか？」

(勿論いいワケないでしよう)

「……まあ、いいですよ」

「酷いなあ、心の中で『いいワケがない』って思つたでしょ。私が私の

家に居ちゃいけないってことですか？」

（私の……家？）

まさかと耳を疑う。そんな偶然があるのか、と。

「それにしても澪様らしくないですね、驚いた表情をみせるなんて。あつ、私はこの『季節の魚介フルコース 松』で！」

待て、しつと対面の席に座るんじゃない。しつと注文するんじゃない——と言つても無駄だろう。唯姫には、そんな気持ちにさせてくる何かがある感じがする。

「ありがとうございます、澪様！」

「私は奢りませんよ？」

「え、いいじゃないですか。 濱様は私と違つてたくさんお金持つてるんですし……」

だからといつて、何故コース料理で、しかも一番高いものを注文しようとしているのだろうかこの子は。値段を見てみれば、五千円と少しぐらいで、他のコース料理より千円以上高いときた。

「……」の家の方であれば、賄いでも何でも食べられるのではないですか？

「たまには余り物じやなくて、ちゃんとした料理が食べたくなるときだつてあります！ね、澪様？」

——すると、唯姫が膝を擦りながら近寄ってきた。

「……茅ノ間さん？」

——ね、澪様】

「…………つ！ いやつ、やめ——！」

「……仕方ないですね、今日だけ特別ですよ」

「えっ、いいんですか？ やつたら、ありがとうございます！」

唯姫はそう言うと、徐にポケットから携帯を取り出した。

……気の所為だろうか。唯姫の着ている制服から漂う柔軟剤の匂いが、いつもより微かに強く感じられる。

「澪様、学校からの連絡、ちゃんと読んでますか？」

唯姫はアクリルキー・ホルダーのついた可愛らしい携帯を開き、その画面をこちらに見せてきた。

「ええ、読んでいます」

読んでいる訳がない。

「読んでるなんならどうしてココに居るんです？ ほら、外出は控えるようにつてちゃんと書いてあるじゃないですか」

唯姫は携帯の画面を指す。近寄つて見てみると、確かにそういう趣旨の内容は書いてあつた。しかし、そんなことは今更だ。この外出は必要不可欠なものだと言つてしまえば、何ら問題は無い。

「それが、どうしたのですか？」

「どうしたのですか？ ジやないですよ。澪様は英ヶ野のトップ、言わば顔なんですから、そこのところは自覚持つていただかないと」

「……私にどうしようと？」

「今日から数日間、私の家に泊まつてください。勝手に外出なんて……しませんよね？」

(泊まる……！？ 数日間、寮に帰らずに、しかも外出もできず……か)
正直、気が乗らないどころじゃなく、今すぐこの場から逃げ出したい。しかし、気になることが沢山あるのも事実だ。

(とりあえず、理由を聞いてみようかな)

「茅ノ間さ——

「——ええ、泊まつてほしい理由ですね。別に、隠すような事じやないですよ~」

「……」

「私は、澪様に危険な目に遭つてほしくないんです。つまり、理由と言われば澪様を護る為ですね」

「……」

「これだけじゃダメですか？ 仕方ないです。澪様が帰るとどうなるか、教えてあげましょう。このまま寮に帰ると、捕まる……下手を

すれば殺されかねません」

「…………つ！ 殺され……？」

自分の身体から血の気が引いていくのを感じる。下がった体温のせいで、今にも指先から震えだしそうだ。

「ええ。ですから…………私が澪様を護ります。これで納得……なんて出来ないとは思いますが、とにかく、私のことを信じてください」「す、少し待つてください」

「何でしよう？」

「殺される…………というのは、その…………少し前の、殺人事件と…………関係がある……？」

「ええ、そうです」

「その、殺人犯に…………？」

「ええ、そうです。それに、ほら。私の家に泊まつていけば、美味しい海鮮なんていつでも食べられますよ！ ……私はお金出しませんけど」

「ちょっと、考えさせてください」

「それじゃ、その間に注文しておきますね」

「…………私も茅ノ間さんと同じので」

（帰つたら危険…………かどうかは、実際のところ判断がつかない。それに、今日の唯姫の行動も変だ。もし寮が本当に危険だったとして、この子の傍に居ることで安全になるのだろうか？）

「この“季節の魚介 フルコース 松” お願い！ あつ、澪様のは梅コースで大丈夫だよ」

（私は英ヶ野の中で……いや、東北の中でもかなり戦えるほうだという自信はある。力で襲いかかつて来ようものなら、抵抗することも充分可能だろう。唯姫もそれは分かつている筈だ）

「きましたよきましたよ！ うわ～美味しそう！」

（しかも、数日間泊まつたからといって、その間に何が変わるというのだろう。まだ今は、分からないことしかない。気持ちは全く乗らないが、唯姫の言葉に乗せられて泊まるのも、選択肢から除外できる理由が無い……）

「このトマトも美味しい～！」

(そうすると、取るべき選択肢は……ん？　トマト？)

意識を戻し、目の前のテーブルを見てみる。そこには、いくつかの品が既に並べられていた。

「あれ……茅ノ間さんの料理と全く違うような気がするのですが？」

「そりやそうですよ。私が松コースで、澪様が梅コースなんですから。ほら、同じ“季節の魚介 フルコース”ですしだして……」

どうやら唯姫と頼んだものが違うらしいが、目の前の料理の中には、アサリのトマト煮込みも入っている。

「あー！　ちよつと、私のバフンウニ！　取らないでください！」

「私のお金ですから。代わりに、アサリのトマト煮込みあげますよ」

「むぐぐ……あつ、だ、ダメですって！　大トロだけは！　流石の私でも怒りますよ！」

こうして、一人優雅に高級な昼食を嗜むという理想とは全くかけ離れた、二人の騒がしい時間が過ぎていった。まるで、先程あつた出来事を忘れたいかのように。

L6 その真意

「それで……もし泊まるとして、着替えなど生活に必要なものはどうするのでしょうか？」

唯姫から奪つた大トロを口の中へ放り込み、純粹な疑問を投げかける。泊まるという選択肢を取つた際、どのように行動すればよいかの指標が一切無い状態だ。

唯姫も私の決断を迫り、はやくはやくと話を進めて来るだろう。頭の中を整理するための時間を稼がせていただこう。

「そんなに考えなくても大丈夫ですよ、お泊まり会みたいなものです。大トロ返してください」

まずは可能性を考察していこう。唯姫の提言を無視して帰った場合、寮に居ても襲われる危険はあるかもしれない。もしそれが無いとしたならば、唯姫が泊まるよう勧めてきた理由の説明が必要となる。考えるべきは、唯姫の行動は善意からなのか、それとも悪意からなのか、若しくはどちらでもないの三パターンでいいだろう。

「着替え用の下着と制服、タオル程度しかこのリュックには詰めていますが……」

善意からだつた場合、確かに寮に危険がある可能性は高い。唯姫も私の力量を知つていてる訳なので、対処出来ないことも充分に考え得る。また、唯姫はその事態に対処する手段を持つてはいるのだろう。泊まる行為自体が対処する手段なのかもしれない。悪意からだつた場合、当然唯姫の家に泊まるのは危険だ。理由は全く検討がつかないが、寝込みを襲われる危険だつてある。

——いや、唯姫が私に危害を加えるつもりであれば、自分の家に呼ぶ理由は無い……？ 私は一人部屋で、鍵なんて付いて付いていないようなものだ。夜中の就寝中に侵入されれば、私でも抵抗のしようがない。

「澪様、いつも制服しか着ないじゃないですか。私の制服、貸しますよ。サイズが合うかは分かりませんが、伊勢エビ返してください」

それならば、全く知らない殺人犯と唯姫に襲われる可能性、どちらが高いと言えるだろうか。唯姫は仮にも同じレギオンのメンバーとして共に戦ってきた仲間だ。唯姫に襲われる可能性は前者と比較してかなり低いと捉えていいだろう。単なる願望ではない。

「下着の問題もあるでしょう。今着ているのを含めて二セットしかありません」

そして、どちらでも無かつた場合も考えられる。ただ単に、唯姫が私に泊まつて欲しかった……などそういった感情があるかもしれません。その場合、帰つても帰らなくても危険性はゼロに等しい。やはりこれについては考察する意味は無いだろう。

「うちは一日一回洗濯回しますから、すぐ干せば乾くと思いますよ。お風呂も系列店で天然温泉がありますから、ホタテの酒蒸し返してください」

そうすると、比較すべき点は必然的に、唯姫の言う殺人犯と唯姫自体の危険性となる。今日の出来事から唯姫を疑いたくなる気持ちはあるが、ここを感情論で語つてしまつてはいけない。慎重に、唯姫の話は虚偽か真実かを比較しなければならない。

「具体的には何日間ぐらい茅ノ間さんの宅で過ごすこととなるのでしょうか？」

いや……これを二択で考えてはいけないだろう。今日の私は、少しばかり偏屈になつているのかもしれない。唯姫自身が事態を間違えて捉えている可能性だつて勿論存在する。その可能性を含めると、泊まらない方に天秤が傾くことはあるだろうか。

「まだ分かりません……が、最低三日間とカレイの煮付けはいただきたいですね」

三日間というのは、行動を起こすまでの時間なのか。それとも、三日間で決着をつけるということなのか。

「茅ノ間さんはその間、何をなさるのですか？」

直球な質問も悪くはないだろう。もし拒否するようであれば、徹底的に問い合わせるだけだ。答えてくれなくともいい。それも一つの情報となるのだから。

「そうですね……私は問題の解決を図ります。澪様は家でゴロゴロしていてください。それと……」

「それと？」

「……私のお魚さん、全部無くなっちゃいましたよ？」

「そうですか、では私の分を食べてください。これなんて美味しいぞじやないですか？　”サーモンとモツツアレラチーズのカプレーゼ”

“

「それは……まあ、もらいますけど……」

自分の気持ち的には、唯姫の言う通りに動きたくない。しかし、俯瞰的に見るならば、唯姫の家に泊まった方がいい結果となる可能性の方が高いと言わざるを得ない。流石に同じレギオンの仲間だとう信頼値が大きすぎる。そして、私は確率の高い方に賭ける。自分は今までそうして生きてきたのだから。

(……こんなにも身の危険を感じたのは初めてだけど)

「私が茅ノ間さんについて行くのはどうでしょう？」

泊まることにして、いざとなれば何処へでも逃げ出せばいい。今は唯姫のことを信じてみよう。

……決して、思考を放棄している訳ではない。私の目の届かない様々な情報を確率的に考えての結論だ。その確率に変動が起こったときは、また行動を変えねばいい。

「……やつとその気になつてくれましたね！　ありがとうございます、澪様！」

——あれ、表情に出ていただろうか？　いや、そんな筈はない。ポーカーフエイスは一番の得意分野……だと思う。

「——茅ノ間さん、一つ伺つてもよろしいですか？」

「ええ、モチロンいいですよ」

「何故私が決めた考えが分かつたのでしょうか？」

興味本位も交えた質問だ。それに、今は茅ノ間唯姫という人物をもつと知らなければならぬ。ひょつとしたら――

――彼女は、私が想像している以上のバケモノかもしれない。

「そんなに気になりますか？」

「ええ、とても気になります」

「全く仕方ないですね、澪様の為にも教えてあげましょう」

「私の……為に？」

「ええ、澪様の為です。まず——澪様の行動はとつても分かりやす過ぎます。行動理念……と言つていいのかは分かりませんが、必ず自分の利益になりそうな方向に動きますよね？いや、不利益にならなそうと言い換えてもいいでしよう」

「……ええ、そうですね」

「それを知つていれば後はカンタンです。澪様には私の家に泊まつていく考えに傾く情報を与え続ければ良いだけですから。今日はそれすら必要無かつたですから、余計に。モチロン、百パーセントの精度で管理することは出来ません。なので、少しでも天秤を傾けてあげればいいだけです。澪様が計り間違えさえしなければ、私の求めるように思考を働かせてくれますからね」

「……」

「澪様なら勘づいちゃつてると思いますが、今こうやつて茅ノ間唯姫の考え方をペラペラ喋つているのも、最後の後押しです。私が今とにかく欲しいのは、澪様からの信用ですから。もう気持ちは完全に固まつたんじゃないですか？」

「……」

——やはり、この子は普通じやなかつた。入学から今の今まで、一切そのような能力を見せた素振りは無かつた……と、思う。今この現状、唯姫がこうやつて自分を明かさなければどうしようも出来ない、非常に深刻な事態であるとも捉えられる。

「まあ、気持ちが固まつたのはよく分かりました。だつて澪様、自分で何かを決断するとき、目つきが少し変わるじやないですか。そのクセ、私みたいな人にはすぐ見抜かれちゃいますよ？」

「ええ——そうみたいですね」

「ちょっと、不貞腐れないとくださいよ～？ 逆に言えば、私ぐらい

じゃないと気づかないんですから。あと、澪様の洞察力が凄まじいのは分かるんですが、もう少し他人を意識した方がいいですね。そんなだから、私の掌の上で転がされてるような感覚に陥るんです」

そんな事は分かっている。分かつてはいる……が、改めて言われると心に刺さるものがある。

唯姫の顔を見てみれば、明るい表情に笑みを浮かべてこちらを見つめていた。

「まあ、澪様だつてお疲れでしょうし、続きの話は私の部屋でしましますか。話してあげちゃいますよ、今回の事件のこと」「…………っ！」

まさか――唯姫は事件と何か関係があるというのだろうか。頭の中を整理するどころか、逆に搔き乱されているかのようだ。私は一体はどうすればいいのだろうか。

気がつけば、最初にあつた余裕は完全に消え失せていた。

「あと――ああ言つといて何ですが、私の言うことは信用しないでくださいね。せつかくの澪様の強み、潰しちや勿体ないですから」「…………当たり前です。分かつてます、そのくらいのことは」

ふう――つと息をつき、瞼を閉じる。唯姫に言われた通り、私は他人に意識を向けることを怠りすぎている。それは、他人に興味がないのとは違う。他人への気遣いが足りてない、他人を軸とした行動をしない、そういういた意味なのだろう。

「それじゃ、今から私の部屋に案内しますね！　ふふっ、誰かを私の部屋に呼ぶなんて初めてです、楽しみ♪

唯姫は立ち上がりそう言うと、ついてきてください――と個室を出た。

L7 突き落とします、容赦なく。

【十月二日木曜日午後三時十分 茅ノ間唯姫の自室】

唯姫に連れられて入るとそこは、意外にも女の子らしいピンクの装飾が目立つ部屋であつた。

入ってきた扉側の壁際には、勉強机が置かれている。机上の棚には教科書が並べられており、私が一学年の時に使っていたのと同じもので、少しばかりの懐かしさを覚える。

ピアノ柄の鉛筆立てには何も入っていない。しかし、過去に使われていたと思われるような汚れは付着している。トマトの形と色をした鉛筆削りも同様に、今は使われていないのだろう。

机の端には写真立てが置いてある。映っているのは唯姫と――他に二人、どこかで見たことがあるだろうか？……思い出すことは出来ないが、英ヶ野の制服を着た人物が映っている。三人とも明るい表情で手を繋いでいて、背景は英ヶ野のグラウンドとよく似ている。この二人は多分、同級生か何かなのだろう。

部屋の奥にはベッドや本棚が置いてある。本棚の中には多くの漫画がや小説本が置いてあり、最近の漫画や、名前しか知らない有名な著書なども入っている。

扉から見て左側に置いてあるテレビ台の上には、テレビがいや、ただのモニターだろうか。見ただけでは分からないが、最新のゲーム機と共に置いてある。

「ここが私の部屋です、存分にくつろいでつてください！」

唯姫は柔らかな笑みを浮かべながらそう言うと、そのままベッドに腰を下ろした。

「……ええ、そうさせていただきます。ところで、茅ノ間さんはこの後どうする予定ですか？」

「私ですか？ 私なら今日はやることありませんから、このまま部屋にいますよ」

こうして普通に話している唯姫を見ていても、先程のような一面が

あるとは到底思えない。今日の唯姫が嘘だつたかのようすら思えてしまう。

そして、この部屋を見渡すと、ある違和感に気がつく。その違和感の正体はすぐに分かつた。

(この部屋――窓が、無い?)

「あれ? 濡様、どうかしたんですか?」

「……いえ、何でもありません」

「そーですか。じゃあじやあ、折角来てくださいたんですから、ゲームでもしましようよ!」

「……勉強は?」

「ギクツ」

実のところ、唯姫の学力を私はよく知らない。そんなに悪くは無いとなながら聞いたことはあるが、一学年トップであるななの学力をアテにして話すことは出来ないだろう。

「そつ、そんなの後でいいじゃないですか! ゲームしましようよゲーム♪」

「そんなことを言つていたら月様みたいになりますよ。学業の方はどうなんですか?」

「うーん……ほどほど?」

「まあ、少しだけならいいでしよう。それで、何をやりますか?」

私はこう見えて、ゲームというものが得意だ。やはり天賦の才といふものなのか、何でもそつなくこなしてしまえるのが私、京極濡といふ人物なのだ。唯姫の勉強の方も気にならなくは無いが、少しくらいは相手にしてやつてもいいだろう。

——それに、私自身が気晴らしを求めていた部分はあつた。落ち着きを取り戻すためにも息抜きは必要だ。

「なんでもいいですよ、濡様は何がやりたいですか?」

「それでは……この『テトリス』なんてどうでしょう?」

「いいですね! 早速やりましょう!」

そう応える唯姫の中には、既にそのカセットと思わしきモノが握られていた。私は唯姫から渡されたコントローラーを握りしめる。

テトリス——言わずも知れた、世界的な落ち物パズルゲームである。そして、私が最も得意とするゲームのうちの一つでもあった。ルールは至つて簡単、落ちてきた正方形四つ組のブロックを横一列に並べて消すだけだ。対戦となると少し難しいルールも出てくるが、基本的に積み上げて消すを繰り返すゲームとなっている。

(……？　コントローラーが一つ……確かに、唯姫は自分の部屋に人を呼んだことは無いと言っていたな……)

「じゃあ、対戦しちゃいます？」

「ええ。容赦は……しませんよ？」

「受けて立つてもらいますよ、澪様！」

唯姫の声はとても弾んでいる。まるで年頃の女の子そのものだ。

……実際、年頃の女の子ではあるが。

「ところで澪様、こんな話は知っていますか？　いや、澪様なら知つてしますよね」

画面を凝視しながら、唯姫は話しかけてきた。番外戦術か何かだろうか。

「知っています。どんな話ですか？」

「あなたは橋の上にいます。橋の下を通る線路の上には五人の作業員がいます。あなたは暴走したトロツコが作業員に向かつて走つているのを見つけました。そして、橋の上にはもう一人、太った人が立っていました。この人はトロツコに気がついていないようで、突き落としてしまえばトロツコは止まり、五人の命は助かります。しかし、太った人は命を落としてしまいます。あなたが何もしなければ、五人の命は確実に助かりません。あなたは太った人を落としますか？」

——こんな話です

勿論知つている。トロツコ問題の事だろう。

——もつとも、私が知つてているトロツコ問題とは少し違うようではあるが。聞いたことがあるのは、路線切り替えのレバーがどうこう……みたいなものであつたと記憶している。

「それが、どうかしたのですか？」

「私は澪様の意見が聞きたいんです。澪様ならどうしま——

ちよ、ちよつと、速すぎますって！」

「……私の意見を聞く前に、茅ノ間さんの考えを教えていただけませんか？」

こんなにも擦られ続いている話、今更何を考えることがあるのだろうか。唯姫は私に何を求めているのだろうか。

「うーん……私であれば、容赦なく突き落としちゃいます」

「どうしてですか？」

「だつて、五人の中には知り合いがいるかもしれないじゃないですか。だけど、目の前の太つた人は、確実に知らない人です」

（……それは、前提がおかしい。唯姫のような人が本質を見ずに話すワケが無い。今の発言は多分、本心じやない）
「分かりませんね。本当はどうなんですか？」

「何もしません。もしくは――」

「……もしくは？」

「あっ、また負けた！　ちよつと、澪様強すぎませんか？」

「もしくは？」

「――私が橋から飛び降ります」

「それでは誰も助かりませんよ？」

「はい、助からないです」

「……考へ得る限り、『最悪』の結果になると言つてもいいでしよう」

「最悪――確かに澪様にとつてはそうなのでしょうね。でも、私は飛び降りますよ」

私は茅ノ間唯姫という人物の考へが分からぬ。しかし、彼女は京極澪という人物の考へを分かつてゐる……のだろう。そう思うと、あまりいい気分にはなれない。

「澪様はどう考えますか？――なんてね。そんなの聞かなくても分かりますよ。澪様なら、太つた人を突き落とします――」

「……？」

「……あれ、もしかして、唯姫が私の考へを読み違えた？　そんなこ

とは果たしてあるのだろうか？

「――なーんて、そんなことはしませんよね。澪様は合理主義で

すから」

「……合理主義だと言うのであれば、五人の命を救うために、太つた人を突き落とすのが普通じゃないですか？」

「それは一般論でしよう。確かに合理主義者でそうする人は多いかもしません。それと、そうするのが正しいというのは功利主義です。だけど―― 濬様は違いますよね？」

「……何が違うというのですか」

「やつた！ 初めて濬様から一本とれましたよ！」

「……」

「……えつと……」

「……」

「……説明する必要なんてありますか？ 仕方ないですね、分かりきっている事ですが、敢えて言いましょう」

「一体唯姫は、何を語るのだろうか。そして、それは私にとつてどのようなものなのだろうか。

「濬様にとつて―― 他人の命は平等に無価値です。五人だろうが一人だろうが、太つてようが瘦せてようが。そして、太つた人を橋から突き落とすという行為は、濬様にとつてはリスクでしかありません。誰が見ているかも分からぬし、落とした事を罪に問われるかもしない。それならば、見て見ないフリをするのが „濬様にとつて” 最も合理的と言えるでしょう。違いますか？」

――全く、その通りだ。ここまで私の考え方を当てられてしまうのは、とても気味が悪い。

「……違いませんね」

「違わないでしようね。あつ、別に、私が他人の考え方を読み取る能力を持つてはいる……なんてことはありませんから。ただただ濬様の行動は単純、それだけの話―― うわつ、待つて、ちょっと、負けちゃいますー！」

そもそも、唯姫は何故トロツコ問題の話を持ち出したのだろうか。

私に伝えたい事があつたのか、もしくはただの興味からか。
結局、今はこの話題の意味を知ることはできなかつた。そして、そ
れに気がつけるのはまだ先の話であつた――

L8 牢獄

【十月二日木曜日午後六時半 茅ノ間唯姫の自室】

「ぐぬぬ……」

唯姫の部屋に入つてからどれくらいの時間が経つただろうか。隣を見るとそこには、悔しそうな顔でこちらを見つめる唯姫が居た。
「むぐぐ……まさか、ここにある全部のゲームで勝てないなんて……」「才能の差というものです、諦めてください」

「もう……認めざるを得ません……」

少しだけとというつもりで始めたゲームは、かなりの長時間に渡つて行われた。時間の感覚が少し狂つてしまつたのだろうか？

壁に掛けられた時計を確認する。長針が指しているのは一時十五分。短針はついていないタイプだ。こここの部屋に入つてきたのは――

(――あれ？ 時計の針は……動いていない？)

部屋に入った際に時間を気にしなかつた自分を悔やんだ。リュックから携帯を取り出し時間を確認すると、示されているのは午後六時半。感覚で言えば三、四時間ぐらい経つている気がするため、部屋に入つたのは二時から三時頃なのだようと適当な予想をする。
「茅ノ間さん、あの時計は動かないのでしょうか？」

壁掛け時計を指さしながら訊ねる。

「ううん、そういうえばずっと動いてないです。それと……」「何でしようか？」

「そろそろ『茅ノ間さん』じゃなくて『唯姫』と呼んでもらつてもいいんじゃないですか？ ほら、私と澪様の仲ですし」

私に仲良くした記憶は無い。しかし、呼び方に拘りは無いためどちらでも構わないところだ。

「ええ、特に構いませんが……唯姫さん」

「やつたー！ なんだか澪様にもつと近づけた気がします！」

唯姫は満面の笑みを浮かべている。よくもまあこんなにコロコロ

と表情が変わるものだ。

「ところで茅ノ間さん」

「唯姫です。何でしよう?」

「事件の話を詳しく聞かせてください」

——そろそろ頃合いだろう。本題に入るには丁度いいくらいの時間が経つた。

「そうですね……でも、その前に」

「まだ何かあるのですか?」

「……私、お腹が空きました」

「我慢してください」

「嫌です。お腹が空いては口も回らないというものです」

どれだけ焦らすつもりなのだろうか。時間が経てば経つ程、聞きたい気持ちは大きくなっていく。

「ごはん持つてくるので、ちょっと待つていてください。モチロン澪様の分もありますよ!」

「……ありがとうございます!」

「二千円です!」

「やつぱり要りません」

「ツケでもいいですよ?」

「要りません」

「多分もう作っちゃってますよ?」

「……要りません」

「しようがないですね、今日だけは私の奢りです。何も食べないと餓死しちゃいますから」

「……はあ」

「じゃ、今から持つてきまーす」

唯姫は立ち上がり、背中を向けて部屋を出ていった。その後ろ姿を見届けた私も、部屋を物色しようと立ち上がる。

この部屋には気になる点——言わば、不自然な点が多すぎる。

普通の部屋と捉えてしまってはいけないだろう。事件と繋がりがあるかは分からぬが、唯姫の過去を知るキッカケにもなり得るかもし

れない。

(まず、この部屋には窓が無い。それなら——通気口は、どこだ
?)

部屋の壁には壁紙が隙間なく貼られており、変な凹凸は見当たらぬ。天井を見るも、一面普通の模様が広がっているだけで、換気扇のようなものは存在していない。

明確に穴と呼べるものは、先程唯姫が出ていった扉ぐらいだろう。まるで牢獄だ。

(この部屋は一階。地下室とかあつたりしないかな?)

ピンク色のカーペットを一枚一枚捲つて確認してみる。扉はおろか、床下の点検口すら存在していない。ベッドの下を覗いてみても、本棚をズラしてみても、やはり隠し扉は存在しない。入口を閉めれば完全な密閉空間となってしまう。

しかも、クローゼットのような収納スペースも無いときた。

果たして、こんな部屋に唯姫は住み続けてきたのだろうか——

?

プラグが繋がっていない石油ストーブは置いてあるが、少し付けっぱなしにでもすれば中毒まつしぐらだろう。そう考えていると、なんだか息苦しいような気がしてきた。氣の所為だと思いたいものだ。

そして、唯姫が居ない今のうちに、手に入る情報は仕入れておきたい。しかし、この部屋から得られる情報はこれ以上無さそうだ。下手にノート等を開いて勘づかれてしまつても不味い。大人しく帰りを待つとしよう。

(そりゃあ……)

勉強机に置いてある写真立てを再び見つめる。何度見てもやはり、唯姫以外の二人の人物を思い出すことは出来なかつた。しかもよく見て見たら、二人とも顔がそつくりである。双子の姉妹と言われば納得がいく……というくらいのそつくりさだ。

(背景も……英ヶ野女學校のグラウンド——だよね?)

唯姫もこんな笑顔をするんだなど少し微笑ましくなる。今日まで唯姫に対するイメージなんてものは無いに等しかつたし、感情表現が

豊かな子だということも初めて知った。今日は私にとって、収穫が大きい日だつたのかもしれない。

(まあ、あんなに怖い唯姫を見るのはもう嫌だけど……)

休憩室に居た唯姫を見て、心臓が飛び出るかと思ったのはついさっきの出来事だ。

今となつては、唯姫のあの行動も彼女なりに考えてのものだと分かつている。そして、唯姫の頭の良さというのも思い知らされた。

(あまり唯姫の事を考えるより、今は事件について考えた方がいいよね——ん?)

ふと、とある事に気がつく。写真の端をよくよく見てみると、写真を撮った日付も印刷されていた。

『4 3, 09, 23, 15, 03』

(九月二十三日……ついこの間の日付だ。今日は十月一日だから、約一週間前——あれ……? や、違う……!)

『4 3』

(二千つ——四十三年! 今から……十年前!? 一体……どういうこと!?)

「——澪様」

「……っ!?

「ご飯持つてきましたよ。豪華な海鮮丼です!」

「え、ええ、ありがとうございます……」

(写真を見ていたことは——バレてなさそう……?)

唯姫の足音が聞こえ、半ば本能で元座つていた位置に戻つていた。少しでも戻るのが遅ければ、完全に怪しまれていたことだろう。

しかし、心臓の鼓動は落ち着かず、冷や汗もかいている。声のトーンも震えてしまっているかも知れない。

「澪様がこつちで、私がこつちです!」

「……ん？ 私の方が具材が少ないような……」

「お昼の分、返していただきましたから！ ふつふくん」

具材が少ないなんてそんな事を考えていられる場合ではないが、何とか平静を保とうと普通の会話を心掛ける。

「……まあ、茅ノ間さんの奢りと、いうことであれば仕方ないでしょう」「あれ？ 意外とはやく引っ込みましたね。あと、茅ノ間さんじやなくて唯姫です」

「そうですね、唯姫。ところで、事件の話はもうしていただけるんですよね？」

「はい、それじゃあ食べながらでも話しちゃいましょうか」

「……」

部屋には一時の静寂が訪れた。私は息を飲み、唯姫の最初の一言を待つ。

海鮮丼を持ちながら立ち上がった唯姫は、そのままベッドに腰をかけ、こちらを向いて語る体勢となつた。先程までの明るい唯姫とは違ひ、私を見るその黄色い瞳からは、まるで生氣を感じることが出来なかつた――

M9 目撃したこと

さて、今回の事件について話しかやいましょうか。
まずは、事件の概要についてです。

事件が起こつたのは、十月一日月曜日午前十一時半以降のことでした。事件現場は英ヶ野女學校学生寮二年棟、澪様の自室がある敷地ですね。

被害者の名前は『萬年ひめの妃乃』。英ヶ野女學校工廠科の二年生で、レギオンまたは予備隊への所属経験はありません。ここに入学してからは、マディックとしてアンチヒュージュエポンを用いて戦っています。その傍ら、一流のアーセナルを目指して勉学に励んでいたと聞きました。

時間的には、本校舎にある学食へと向かう途中だつたのでしょう。彼女の武器であるアンチヒュージュエポンは持つていませんでした。次は、死体の発見についてです。

これは新聞にも載つていたことかと思いますが、発見したのは『頓宮叶愛』教導官と、他数名の生徒とのことでした。

死体の胸にはCHARMでつけられたものとみられる大きな刺し傷があり、出血多量による失血が死因と思われます。まだ検死が行われていないので、詳しい状態までは分かりません。

発見時は既に血溜まりのような状態となつており、生徒達にとつてはショックの大きい光景だつたそうです。頓宮教導官は他の生徒を現場から離れさせた後、英ヶ野女學校の理事長、経営本部へと通報を入れています。その後、警察への通報が行われたそうです。

「……ここまでで何か、質問はありますか？」

「何故茅ノ間さんは、これほどまでに詳しい状況を知つてているのでしょうか？」

「ああ、その事ですか。私、少し調べたんです。実はあの日、被害者の方とすれ違つたんですね。バスの欠便でたまたま二限目に出れな

くて、借りてある寮室から荷物だけとつて本校舎に向かうところで、事件の被害者——妃乃様を見かけました

「待つてください、何故二年棟なんですか？ 唯姫さんは一年生でしょ。そこは一年棟に行くところでは……？」

「澪様には言つてませんでしたっけ？ 私が寮室を借りているのは二

年棟なんですよ。というのも、本来英ヶ野女學校は全寮制ですから、寮はとならきやいけないんです。でも、入学するときに事情を話して、二年棟にある小さな部屋を特別に貸してもらつたんです

「茅ノ間さんが妃乃さんとすれ違つたときには、何も異変はありませんでしたか？」

「ええ、特に何も。私も話を聞くまでは、事件のことなんて一切知りませんでしたから」

「もう一度聞きます。何故茅ノ間さんはそれほどまでに詳しい状況を知つているのでしょうか？」

「……頼宮教導官に直接聞きましたから」

「直接？」

「はい、直接。それだけの話です。まあ、英ヶ野上層部はだいぶごたついてるつて感じはしましたね。なんせ、英ヶ野女學校で殺人事件なんて、十年来ですから」

「十年……来？」

「そうですよ？ あれ、結構有名な話だと思つてたんだけどなあ……」「……私は知りませんでしたが」

「ほら、呪いのスポットなんて、子供っぽい呼ばれ方をするようになつたキッカケの事件です」

「呪いのスポット……ですか。犯人は何故この場所で殺人事件を起こしたのでしょうか？」

「さあ。犯人の検討もついていない状況ですから」

「犯人の……検討がついていない？ どういうことですか？」

「ん？ そのまんまの意味ですよ？」

「しかし茅ノ間さんは、殺人犯から私を護るためにと……」

「あれは嘘です」

「嘘……何故そのような嘘をつく必要があつたんですか？」

「だつて、その方が澪様に危機感を与えることができるじゃないですか。まあ、そうじやなくとも澪様が危ない状況なのは変わりませんが」

「危ない状況というのは?」

「さつき私、頓宮教導官と直接話したつて言いましたよね。その時に聞いたんです。澪様が殺人犯の第一候補として挙げられている……と」

「……っ！」

「でも、この部屋は何があつても絶対に安全です。捕まる危険性は一切ありません」

「何故そんな事が言えるのですか?」

「それは話せません」

「どうしてですか?」

「……話せません」

「分かりました。無闇に詮索はしません」

「ありがとうございます。さて、困りましたね。今分かつている情報だけじゃ、犯人の検討のつけようがありません。そこで澪様の出番です」

「私……ですか?」

「はい。私は情報を集めます。それを元に考察するのが澪様の役目です」

「情報を集めるといつても、警察の調査が入ると手を触れられなくなってしまうのではないか?」

「そんなのどうとだつてなりますよ。こんな古い建物の敷地、侵入する経路なんて山ほどありますから。夜中にでもちよちよつと入っちゃいますよ~?」

「……唯姫さんは何故そこまでして私を助けようとしますか……?」

「当たり前じゃないですか、大切な……大切な先輩なんですから」

「……正直、私は嫌われる側の人間だと思うのですが」

「確かに、周りから見たらそうなつてしまふかもしません。でも、私は澪様のことが大好きですから」

「そう……ですか」

「はい。それで、今の話を聞いて、何か気がついたこととかはありますか？」

「いえ、特に。強いて言えば、CHARMの刺し傷がある…………ということは、犯人は少なくともリリイである可能性が高いですね。しかも斬撃タイプのCHARMじやないと刺し傷にはなりません」「確かにそうです。英ヶ野女学校で扱っているのは『ファンアフプー』『^I_x^b_a^r_aⁿ_q^u_e イシユバランケー』『グングニル』の三種類です。そして、澪様だけの特別な機体『シバルバー』もあります」

「そうですね。そのうち斬撃モードがあるのは『イシユバランケー』『グングニル』『シバルバー』。つまり、リリイではあっても『ファンアフプー』を用いている人は犯人の候補から外れると考えていいでしょう。勿論私も候補に含まれるという訳です」

「じゃあ、外部犯の可能性はあります？」

「ええ。その可能性も無くはないでしょう。しかし、この地域でリリイとしての活動を行える学校は、英ヶ野以外にありません。英ヶ野のリリイ以外が此処に来るなんて相当珍しいと言つても過言ではないでしよう」

「じゃあ可能性としては、英ヶ野のリリイである可能性の方が断然高い……ということですね。他に何か分かることはありますか？」

「……当たり前のことですが、殺人事件が起きた時間帯に、講義に出ていた人は犯人の候補から外れますね」

「澪様は？」

「出ていません。その時間帯は寮室で寝ていましたから」

「あちゃー、これは真っ黒ですね。周りから見たら怪しすぎます。私が見ても怪しすぎます。でも、澪様はそんなことしないって私は知っていますから。それで、なんで講義に出ていないんですか？」

「サボりました」

「随分とハツキリ言いますね。しかも、その出ていなかつた講義つて

確か……

「頓宮教導官の講義です」

「澪様、やつぱり疑われても文句言えないですよ？　でも、こうやって今、安全な場所に居られるのはラッキーなものですね」

「……ラッキー？」

「私がたまたまショッピングモール内のバス停で出会ったから、この場所まで誘導できたんです。もし出会いってなかつたら、今ごろ澪様の自室で、私が必死に説得しているところでした」

「そうなつたら私は、多分動かないでしよう」

「そこは自覚あるんですね。私と幸運さんに感謝してくださいよ？」

？

「ありがとうございます、か……唯姫さん」

「どういたしまして！　後はまた明日考えることにしましょう」

L10 突き上げてからブチ落とす

【十月二日木曜日午後七時半 茅ノ間唯姫の自室】

唯姫の語りが終わる頃には、目の前に置かれた二つの丼は底が見えていた。唯姫はとても満足度の高い海鮮丼を平らげ、いかにも幸せですという顔をしている。

対する私は、明らかに具材に対するご飯の割合が大きすぎる海鮮丼を腹の中に詰め込み、今にも精根が尽きそうだ。

「ところで……唯姫さん。これからどうする予定ですか？」
「予定？ 明日になつたら動きを見ながら探りを入れるつもりではありますけど……」

「いえ、そうではなくて。今日のこれから予定です」

「ああ、そういうことですか。私は温泉に入る時間まで勉強でもしますよ。それともまだ、事件に関するお話をし足りませんか？」

受験生だというのにゲームばかりしている人には、是非ともうちの一年生組を見習つてほしい。ほら、月様、貴のことですよ。

「今は大丈夫です。私も少し疲れましたから」

「私のベッド使つて休んでもいいんですよ？」

唯姫の表情は冗談めいていた。彼女は勉強机に向かい、棚から教科書を出して広げている。

「……いえ、遠慮しておきます」

「そうですか——つてあれ？ なんか携帯の音鳴つてません？」

床にポツンと置かれた私の携帯が震えていた。唯姫もそれを見つけたようで、こちらに何かを促すような視線を向けてくる。

『——ピロリンツ♪ピロリンツ♪』

「鳴つてないですね」

「ほら、鳴つてるじゃないですか」

「気のせいじゃないですよ」

仕方が無いので携帯を手に取る。勘解由なからの着信だ。

「はい、京極澪です」

『れーいーさーまーつ！』

「……何でしよう？」

少々怒つていそうな声色だ。唯姫はこの時点でこちらに這い寄り、携帯に耳を近づけている。

『まだ頓宮教導官のとこに行つてなかつたんですか!? なーんーでー関係ない私が怒られなきやならないんですか!』

唯姫は怪訝な顔をした後、携帯をつけているのとは逆の耳に、そつと耳打ちをしてきた。

——なんとか誤魔化してください。

「……」

『澪様、聞いてます?』

「……聞いています。』

『今どこにいるんですか?』

「便所です」

『汚い！ 濱様汚い！』

「おトイレです」

『……そうですか、門限までにはちゃんと行つてくださいよ?』

『分かつてます。それではお休みなさい』

『あつ、ちよつ待つ——』

プチツ——

『澪様、頓宮教導官に呼ばれてたんですか?』

唯姫は勉強机に戻りながら、そう問いかけてきた。唯姫はこの事を知らなかつたらしい。

「ええ」

「どういった理由で呼ばれたんです?」

「分かりません」

「何があつたか分かりませんが、絶対に行つたりしないでくださいよ?」

「そうですね、私も嫌な予感はしています」

先程の事件の話を聞いた以上、頓宮教導官に接触するとなると、高確率でこの身に危険が及ぶだろう。勿論そんな危険を冒したくはない。

(――ん？ 少し、おかしいな)

電話の事で、数時間程前の会話を思い出す。

(唯姫はななからの電話の事を知らなかつた……となると……)

「――唯姫さん」

「はい、何でしょう？」

振り向いた唯姫の目を見つめる。唯姫の顔は、どうにも不思議そうだ。

「どうして唯姫さんは嘘をついたんですか？」

「……どの嘘の事でしょう？」

唯姫の顔が、明らかに曇つた。

「休講になるのは今日から――これ、唯姫さんの嘘ですよね？」

「……」

唯姫の顔が、ハツとしている。

「何故嘘をつく必要がある？」

「――そんな事も分からないんですか？」

唯姫の顔が、呆れたような表情になつた。やはり唯姫の表情はバリエーション豊富だ。

「そんな事……」

「ここまで何の話をしてたかもう忘れちゃいました？ 全く、澪様は何も考えてないんですね。私はもう答えを何回も言つてますよ？」

(話を整理してみよう。海岸を歩いていたときの電話で、ななは休講になるのは明日からだと言つていた。対して、唯姫は休講になるの今日からだと言つている。唯姫が否定していないことから、これは嘘。でも、そんな嘘についても簡単にバレるし、何より嘘をつく意味が分からない。唯姫の行動にしては不自然じやない？)

「……まあ、そこに気がついただけでも成長です。澪様流石ですね！」

心にありません――と声のトーンが言つている。

(唯姫はななからの電話の事を知らなかつた。つまり、唯姫は私が休講の話を知らないと思い込んだうえで、嘘をついていたことになる。そして、嘘をついていたときの唯姫の目的は……目的は――)

「！」

「ようやく分かりましたか？」
遅かったですね！」

「私に――来て欲しいから……」

……私は濱様が来てくれるなら、何だつてするつもりでいました。

た三で
私は澤様のことが大好きですからね?」

……私のことが……

いやたをあ
和はこんな取てかしい事を言わせるなんて
湯桶も罪

「……そうですか。理由については納得しました」

「じゃ、私は勉強に戻りますね」

(唯姫が……私の事を……)

私が他人から好かれるなんて、今まで考えもしなかつた。

入学してからの私の言動を振り返ってみても、傲慢で怠惰で色慾で憤怒で――おつと間違えた、勢い余つて身に覚えの無い大罪まで付け加えてしまつた。

それはそうと、自分に好かれる要素なんて一切無いと思つていた。
そして、今もそう思つていて。心境はなんとも複雑だ。

「——濛樣？」

「……はい？」

「何ぼーつとしてるんですか?」

勉強するって言つたじやないか。ほーとするとくらい別にいいだろう。

「私も疲れますから」

みたいですね」

唯姫は相変わらずだ。まるで心を読んだかのように話し掛けてくる。私も同じことが出来たら、どれだけスッキリしていることだろうか。

「……ええ。全くもつて分かりません」

「私は澪様の愛情に惚れたんですよ、覚えてませんか？」

「覚えてませんね」

「まー仕方ないですね、私と澪様じや “記憶力” が違いますから」

「……？」

「私は覚えてますよ、澪様のその本心。決して忘れることはありません」

何を言っているのか分からぬ。もしかしたら、気にして仕方の無い事なかもしれない。

「まあ、分かりました。分かりましたから勉強してください」

「私は何があつても、澪様の事が大好きです。でも澪様、勘違いはしないでくださいよ？ 濱様は周りから見たらクズなことに変わりはありませんから」

上げてから落としてくるパターン。これは心に大きな落下ダメージが入った。

さて、私も勉強することとしよう。勉強机の傍らに立ち、上から唯姫が勉強している様子を覗き込む。これは嫌がらせでは無い、勉強だ。

「……澪様、何してるんです？」

「勉強です」

「嫌がらせですね」

「違います」

「……そうですか」

(開いているのは数学の教科書。何か変な解き方でもしてたらすぐに突っ込んでやるとしよう)

そう心に決めたものの、突つ込む隙は無く時間が流れ去つていくのであつた――

L11 大きいのは

【十月二日木曜日午後九時 茅ノ間唯姫の自室】

「澪様、行きましょう！」

それは、突然の事だつた。勉強をしていた唯姫が前触れもなくピタツと手を止め、此方に振り返りそう言つた。

行きましょう——この言葉に、私は敏感に反応する。

私がここまで来た目的——そう、温泉だ。今日は様々な出来事に巻き込まれたが、本来の目的は温泉で変わらない。湯に浸かり、先日の疲れとイライラを昇華させる為に、ここ湯野浜の地を目指して來たのだから。

心做しか、唯姫の顔も綻んで見える。やはり、温泉の偉大さは誰にとっても共通のものなのだろう。

「今すぐ行きましょう」

唯姫が勉強している間暇潰として読んでいた『プリンキピア・マテマティカ』を床に置き、着替え用の下着が入つたりユックをさつと持ち上げる。

「それで、温泉というのはどこにあるのですか？」

「少しくらい待つてくださいよ、私の準備がまだです」

果たしてこここの温泉は、一体どのようなものなのだろうか。唯姫は、こここの食事処の系列店だと言つていた。同じ建物内にあるのか、はたまた全く離れた所にあるのか。サウナは付いているのだろうか。こんな時だというのに、楽しみで仕方が無い。

そして、閉塞感が強いこの部屋から離れる事が出来るという、一種の安堵感もある。こんな部屋に住み続けるなんて、普通であれば精神が狂つてしまいそうなものだ。

「それじゃあ行きましょう。ちゃんとついてきてくださいよ？」

そうして私達は、温泉へと向かい始めたのであつた。

【十月二日木曜日午後九時十分　温泉宿　泉海】

「ここです、入りましょう」

連れてこられた場所は、先程まで居た建物の随分近くに位置していた。外に出て少し歩いた所にある、月花亭とはよく似た風装の建物だ。入口に掲げられた暖簾には、温泉マークとともに『泉海』と書かれている。

建物の中へ入り、靴を鍵付きロツカーニ仕舞い込む。簀子から一段上がり、これぞ温泉といった感じの畳床を、黒色のハイソックスで踏み進む。

「こつちですよ、澪様」

向かう方向に迷っている私に、唯姫が手を差し伸べてきた。手を取れ……ということだろうか。

「え、ええ……」

「ふふっ、ありがとうございます」

差し伸べられた手を取ると、唯姫は柔らかく微笑んだ。小さなその手は、弱い力でくいつと引っ張つてくる。

そんな彼女の手は、暖かい——と言えば、嘘になつてしまふだろ。ひんやりとした冷たさが、肌にひしひしと伝わつてくる。

「あれ……唯姫さん、受付は？」

ふと、唯姫の向かう方向が脱衣所だということに気がついた。普通であれば、受付を済ませてから向かうべきであるが——

——だつて、私の家ですよ？　お風呂に入るのに受付なんて要ります？

「ですが、私は部外者で……」

「えつと、この時間はそもそも受付閉まっちゃつてますから。九時から深夜の清掃が入るまでが、私達の入浴時間です」

どうやら、このまま私が入るのは無問題らしい。推測するに、唯姫は事前に何かしらかけ合っていたのだろう。

「そうですか」

そうして、流されるように温泉へと進んでいく。

それにもしても、これ程までに綺麗な温泉があるとは思いもしなかつ

た。こちら辺は古い建物が多く、新しい温泉が建つたという話など聞いたことも無かつたからだ。

そして、今になつて気がついたことがある。

(唯姫……私よりも背が高いんだ……)

脱衣所にて、隣に佇む唯姫は、とても瑞々しい肌色を余すところ無く晒している。黄緑色の髪には綺麗な艶があり、見る人は誰もが妖精のような、幻想的な何かを想起してしまうことだろう。

——とは、唯姫を過剰評価してみた結果だ。

「……なに、見てるんです?」

「いえ、何も」

着慣れた制服を、手馴れた手つきで身体から外していく。唯姫は既に服を脱ぎ終わり、メッシュのポーチとフェイスタオルを片手に扉の前で待機している。

私も衣服を全て外し終わり、タオルとヘアゴムを手に取り浴室へと向かう。

「あれ、澪様、シャンプーは持たないんですか?」

「備え付けのを使いますから」

「トリートメントは置いてありませんよ?」

「使わなくとも大丈夫でしょう」

「なんでそれでそんなに髪がサラッサラなんですか……」

特段髪のケアに気を掛けたことは無いが、どうやら、私の髪は他人から見てサラサラの部類のようだ。

「普段から髪には気を遣つてますから」

「えー! それなら今日は、私の浴室セット貸しますよ?」

「いいのですか? ありがとうございます!」

「どーいたしまして!」

貸してくれるというのなら、有難く借りることとしよう。
漸く、浴室へと足を踏み入れる。

唯姫の後を追つて浴室の扉を潜ると、目の前に広がったのは温泉の数々。掛け湯もあれば、足湯もある。外から確認出来た通り、中はかなりの広さだ。

浴室の奥につけられた扉を開けてみれば、そこには露天風呂も存在していた。今日は冷え込んでいるため、露天風呂に入るには絶好の日だろう。

そんな温泉への期待を一旦胸に仕舞い込み、シャワーの前の椅子に腰をかける。

(あつ、そういうえば……)

確か唯姫は、自分の浴室セットを使つていいと言つていた。椅子から立ち上がり、シャワーの音がする方へ少し歩いて唯姫の姿を探す。先程腰をかけた場所の、小さな壁を挟んだ逆側にその姿はあつた。髪を洗つている最中の唯姫に、後ろから声を掛ける。

「唯姫さん」

「あつ、勝手に使つていいですよー」

何を言いたいのか察してくれたのだろう、何も言わずとも答えてくれた。そうして唯姫の隣の椅子に腰をかけ、唯姫の前に置かれた三つのボトルを手に取ろうとした。しかし――

(あれ…………どれが、シャンプー?)

その三つのボトルは全て同じ、透明な容器だつた。恐らく、温泉などへの持ち込み用に中身を移し替えているのだろう。

「ピンクのがシャンプーで、白っぽいのがトリートメント、よく分からぬ色のやつがコンディショナーです」

手に取るのを迷つていると、髪を流し終えシャワーを止めた唯姫が口頭で教えてくれた。

「ありがとうございます」

「いえいえ、お気になさらず」

手には多めのシャンプーを取る。私は唯姫と比較しても髪が長いため、洗うのにはかなり時間がかかる。

しかし、身体を洗つてているだけの時間を嫌と思つたことは無い。手を動かしていると、何かと考え事が捲るからだ。

(唯姫)――彼女の恐ろしい面を今日、知つてしまつた。でも、こうしている分には到底あんな面があるとは思えない。だからこそその恐ろしさというものがあるんだけれど

唯姫について、再び確認し直す。正直に言えば、全く、現実感というものが湧かないのだ。

（今まで、唯姫という人物をよく知らなかつた。それだけじゃない。同じレギオンのメンバーでさえ、よく知らないことばかりだ。他人を見る事は苦手じゃない筈なのに、一体何故…………まあ、別にいいか）考えても分からないことは分からないと、思考をシャンプーと一緒に綺麗さっぱり洗い流す。

（そりいえば唯姫、私が思つていたよりかなり大きかつたな……）

胸も身長も目の当たりにして、私のソレよりも大きいことに気が付いた。手を握った時は気が付かなかつたが、並んでみるとその差ははつきり見て取れる。私が唯姫より大きいのは、どうやら態度だけのようだつた。

——そんな事を考えているうちに、唯姫の姿は隣から消えていた。既に温泉に入つてゐるのだろう。

そうこう考へてゐるうちに、私も髪が洗い終わり、温泉に入ろうと椅子から立ち上がるのだった。

L12 蝶む呪い

【十月一日木曜日午後九時二十五分 温泉宿 泉海】

極楽。

——この言葉が似合うものなんて、温泉の他にあるだろうか。肩の当たりまで湯に沈むと、体の芯まで温まつていく。

こうしていると、日常を過ごすうちに蓄積されてきた体や脳の疲れが、綺麗さっぱり浄化されていくようを感じる。温泉に浸かっているこの時間だけは、唯一何も考えずにいることができる。

——ああ、なんだか目の前が、ぼやけているようだ。

「澪様、澪様。あれ、死んでないですよね？」

「……生きてますよ」

「顔真っ赤ですよ？ のぼせたんじゃないですか？」

気がつけば隣では、ピンク色の手拭いを頭に乗せた唯姫が温泉の縁に腰をかけていた。彼女は足をパチャパチャさせており、お湯が私の肌に飛び散つてくる。

「そろそろ上がります、待たせてしまい申し訳ありません」

「いえ、まだ浸かってもらつても大丈夫ですよ」

「それなら遠慮なく

「そろそろ換水の時間ですけど」

「では遠慮します」

そろそろ温泉からあがらうとふらつく頭で立ち上がり、唯姫の隣へと腰をかける。私はどうやらのぼせていいようだ。

「澪様、ちょっと気になつてたんですけど」

「なんでしょう？」

「今まで使つてた黒い髪留め、つけなくなつたんですね」

（ああ、そのことか——）

急に一体何の話だと思ったが、言われてみて思い出す。つい一週間

程前のことだ。

私には気に入つてた髪留めがあつた。それは、ショッピングモールで買ったごく普通の髪留めだつた。

買ってからはほぼ毎日、外へ出る時はその髪留めを付けていた。しかしある日、図書館で寝落ちをしていると、いつの間にか髪留めが無くなつていたのだった。

「ええ。いつの日か、無くしてしまつて」

「とても似合つてたのに、残念です」

唯姫はふーんと言つて立ち上がる。隣に座つていた私も、釣られるようによつくりと立ち上がる。

「澪様は身体洗いました？」

「いえ、まだ洗つてません」

「あつ、じゃあ私先にあがつてますね」

温泉はただの銭湯と違ひ、身体を洗うのはお湯に入った後の方がよい……という話を聞いたことがあつた。詳しいことは知らないが、温泉の成分が云々ということらしい。

「少し待つてください。唯姫さんは、この後どう動くのですか？」

「私は一回校舎に行きますよ。澪様は出来るだけゆつくりしていくください。ひよつとしたら、休んでいられる状況じや無くなるかもしけませんから」

「温泉に入つた後なのに、大変ですね」

「澪様の為です！」

「一体何が、唯姫をここまで突き動かしているのだろうか。私には到底分からぬ。」

「校舎……といふと、やはり殺人現場ですか？」

「そうですね。今日くらいしか入れないかもしけないので」

殺人現場——新聞には『呪いのスポット』と書いてあつた。唯姫の話によると、二年寮棟がある敷地らしい。
(呪いのスポットつて何なんだろう……)

「そういうえば唯姫さん」

「はい、何でしよう?」

「殺人現場が『呪いのスポット』であることには、何か理由があると思
いますか？」

「…………知りませんよ、そんなこと」

(―――?)

おかしい。今、唯姫は明らかに目を逸らした。何かへの拒絶反応だ
ろうか。

「もう一度聞きます。『呪いのスポット』であることは、何か関係があ
りますか？」

「知らないって言つてるでしょう」

(…………これは、聞いたたすべきかもしない。唯姫には、私に隠し
ていることがまだまだある筈だ)

「質問を変えましょう。唯姫さんは『呪いのスポット』について何か
知つて――」

「やめてえええええええええええええええええええええええええええ
!!!!!!」

(―――つ!?)

瞬間、唯姫が温泉内に響き渡る声で叫んだ。その声に驚き、私は一
歩後ずさる。

「…………唯姫さん?」

「あそこはっ! 呪われてなんかつ…………!」

「私も呪いなんて信じていません」

「違う！ 違うのっ！！！」

「そうですね、違います」

「私は…………なに、も…………」

「はい、唯姫さんは何も知りません。私も何も知りません」

「…………」

（少しは落ち着いた――かな？）

唯姫は手を胸にあて、動悸を抑えているようだ。肩は上下していって、呼吸は荒い。

「一旦温泉の外へ出ましょう。私は身体を洗つてますから、先に行つててください」

「はい…………」

落ち着きを取り戻したのだろうか、唯姫の呼吸は普段通りに戻つている。少しの間を置き、私はシャワーの方へと歩き出す。横目で唯姫を見ていると、ゆつくり、ゆつくりと彼女は歩き始めた。どうやら温泉の出口へ向かつたようだ。

（『呪いのスポット』と唯姫の過去の関係――探らないわけには、いかないかな）

温泉で温まつた身体は、この数分ですっかり冷えきつっていた。シャワーの前の椅子に座ると、お尻がひんやりと冷たくなる。

シャワーを出し、さつと身体を流したらタオルに備え付けのボディーソープをつける。私の頭は妙に冷静で、平然と行動を続けていく。

（今日はこの後どうしよう…………言われた通りに部屋で休むか、唯姫の後を追つていくか。でも、追つていくメリットは特に無いかな。唯姫が本当に二年寮棟を調べるというのなら、私が確認できることなんてほぼ無いに等しい。唯姫にバレるリスクだけを抱えることになる）

身体をタオルで擦りながら考える。

（追わなかつた場合、私が得られる情報は唯姫の話だけということになる。それは悪い事では無いかもしねけど、唯姫を信用できない

今、あまり取りたくない選択だ)

泡だらけになつた身体をシャワーで流し、タオルを絞る。温泉に入つた後だというのに、まつたく休まつた気がしない。

そして今後の事に頭を悩ませながら、私は温泉を出ていった――

M0—1 偏愛

【十月一日木曜日午前六時三十五分 英ヶ野女學校 第三訓練場】

「あつ、心葵先輩！ おはようございます！」

「ええ、おはよう」

「こんなに早い時間からどうしたんですか？」

「少し動きの確認をしようと思つてね、貴女も一緒にどう？」

笑顔でそう返事をしてくれたのは同じレギオンの先輩——『LG イシュタム』隊長、頓宮心葵。私がこのレギオンに所属してから何かと、面倒をよく見てくれている。

「いいんですか！ あつ、でも……私、今日は射撃の練習にと思つて来てたんでした……」

「そういうことなら、私の訓練が終わつてからで良ければ少し見に行くわ」

「やつた～！ それじゃあ先に射撃場に行つりますね！」

心葵先輩は、英ヶ野トップの実力を持ちながら、私にいつも優しく接してくれる。心葵先輩みたいなリリイを目指してるつていう友達はとつても多い。

（今日の心葵先輩も優しいなあ～）

一度床に置いた荷物を背負い直し、心葵先輩の姿を名残惜しく目で追いながら、第三訓練場内の射撃場へと向かう。

よいしょと背負ったバッグの中には、愛用CHARM『ファンアフプー』が眠っている。これは、私立英ヶ野女學校に入学したリリイが譲えてもらえる、選べる二本の量産型CHARMのうちの片方だ。

もう一方は『イシュバラシケ』というCHARMである。ファンアフプーが射撃に重きを置いたCHARMであるのに対し、イシュバラシケは射撃機能は搭載しておらず、斬撃のみで戦うこととなる。中等部時代から後衛でサポートを働いていた私は、迷わずファンアフ

プレーを選択した。

(はやく上手くなつたところを見てもらいたいな!)

毎朝射撃場に赴いてはただ一人、淡々と的を射抜く。入学当初からのルーティーンだ。そこに偶に顔を出してれるのが、心葵先輩である。

そうして、期待感で浮かれながら射撃場に足を踏み込む。すると、またもや見覚えのある姿が目に映つた。

「——あれ、叶愛先輩ですか？　おはようございます！」

腰をかがめ、どうやらバッグの中を漁つてているようだ。

「あつ……おはよう……」

なんとも弱々しい挨拶が帰つてきた。

頼宮叶愛先輩——今しがた第三訓練場にて会つた心葵先輩の、双子の妹。

容姿は黒髪ロングの華奢な姿で、心葵先輩と全く同じと言つていいく程にそつくりだ。服装まで同じとなると、いよいよ判別がつかなくななる。唯一見分ける方法といつたら——それは、姿勢だろう。

「えつと、なんかあつたんです？」

「いえつ……ちよつと、探し物を……」

「無くし物ですか？」

「うん……あの、携帯を無くしちゃつて……」

「あら、それは大変ですね。探すの手伝いましょうか？」

「ううん、大丈夫だから！　えつと……部屋に戻つて探してみる……」

叶愛先輩はそう言うと、そそくさと反対側の出口から出ていつてしまつた。その後ろ姿はどうにも頬りない。

「あつ、それじやあまた後でー！」

去つていく叶愛先輩に、別れの挨拶をかけてみる。聞こえているかは怪しい距離だ。

(よし、それじやあ練習はじめようかな)

背負つていたバッグを置き、中からファンアフプレーを取り出す。すつかり手に馴染んだCHARMの感触は、自らがリリイであることを毎度思い出させてくれる。

定位置につくと、奥にあるのが自動的に新しいものに入れ替わる。
これまた便利な装置だと常々思う。

(ふう――)

呼吸を整えC H A R Mにマギを通わす。この瞬間、C H A R Mの重さが一時的に消え、手から浮かぶような感覚を得る。
いつか教えてもらつた通りにC H A R Mを構え、落ち着いて的を見据える。そして――

「――つん！」

ポスツ――――という軽い音が聞こえ、的から少しハズれた場所に穴が空いていた。

「ううん……」

気を取り直しもう一度、先程と同じ構えをとる。

(今度こそ……つ！)

再び的を見据え、そして――射る。

弾けるような音とともに、的には一つの穴が空いていた。一発目を外してしまったことは心に残るが、射撃の威力は入学時よりも少し上がっていることを実感している。

(悪くない……んじゃない?)

適当に自分の射撃の評価をしつつ、また次の射撃へと移ろうとする。一発打てばすぐ次へ――――気がつけば、時間を忘れるくらいにまで熱中し、打ち続けていたようだ。

一通り打ちきり、的には沢山の穴が空いていた。集中力が切れ、手に抱えていたC H A R Mを台へと降ろそうとした。

そのとき――

「――うーん……まあまあ、かな！」

射撃場の入り口の方から、待ちわびていた声が聞こえてきた。振り向かずとも、心葵先輩が来てくれたのだとすぐに確信する。

「心葵先輩！ 来てくれたんですね！」

「当たり前じやない、可愛い後輩ちゃんとの約束よ？ 破るワケない

でしょう

可愛い後輩ちゃん——なんていい響きだろう。顔を綻ばせながら、頭の中で何度も反芻する。

「いつから見てたんですか？ 恥ずかしいなあ……」

「ついさっき入ったばかりよ。貴女、随分と熱中してたみたいだつたから、邪魔したら悪いと思つて」

「いえいえ！ 邪魔だなんてそんな！」

「ふふ、それにしても上手くなつたわね」

「やつた、ありがとうございます！」

人は褒められると成長するものだ。私も例に違わず成長する——

——と、嬉しいかな。

「ところで……」

「はい、何でしよう？」

「そろそろ行かないと、一限目が始まっちゃうわよ？」

「えっ！ もうそんな時間……！」

焦つて携帯を取り出し時間を確認する。そして、ハツと驚く。訓練場に入った時刻から、実に一時間も経過したところだつた。

「すいません！ 私はこれでつ！」

頭を思いつきり下げ、手早く荷物を纏める。せつかく来ていただいたのに、勿体なさと申し訳なさとでいっぱいだ。しかし、講義に遅れてしまうワケにはいかない。

「頑張ってきてね」

心葵先輩が、にこやかな顔で手を振つてくれた。私にはとても眩しい。

「あつ、ちょっと待つて！」

射撃場を飛び出そうとしたところで、心葵先輩から声を掛けられた。

「えつと……なんでしょう？」

「私から一つアドバイス。そんなに焦らずとも、ゆっくり余裕を持つといいわ。最近の貴女、何か焦つているようだつたから」

焦つている——その言葉に、思い当たることは沢山ある。練習

しても上手くならない日々と、どんどん成長していく周りの友達。そんな環境の中、意識しながらも焦っている自分が確かにいた。

「……心葵先輩にはお見通しなんですね。ちょっと焦つてたかもしません。もっと余裕を持つように心掛けてみます!」

「あつ、でも」

「でも……?」

「講義には遅れちゃダメよ」

「はい！」

そうして、心葵先輩の言葉を一つ一つ思い返しながら講義がある教室へと駆けていった――

L13 可能性

【十月一日木曜日午後九時五十分　温泉宿　泉海】

温泉を後にした私は、脱衣所にて濡れた髪を乾かしていた。

ここに唯姫の姿は無い。家に戻っているのだろうか、はたまた既に校舎へと向かっているのか。

備え付けられたドライヤーの出力は弱く、腰まで伸ばされた長い髪はまだまだ乾きそうにない。

「はあ——」

短い溜息をつき目を閉じる。辺りは真っ暗闇となり、機能している筈の聴覚までもが感覚を閉ざす。すると、徐々に思考が秩序を取り戻していく。こうして考えるための姿勢は整う。

——『呪いのスポット』

この言葉が頭の中にへばりつき、まるで取れそうにない。いくら思考を切り替えようと、片隅から消えていくことはない。

(呪いのスポットと唯姫の関係――)

何か繋がるものはないか。疑問を解決してくれる何かはないか。必死に、しかし冷静に情報パズルを組み立てる。

(そもそも呪いのスポットつてなんだつけ……?)

唯姫の言葉を頭の中で繰り返す。

——『ほら、呪いのスポットなんて、子供らしい呼ばれ方をするようになつたキッカケの事件です』

違う、その前だ。私は何を聞いて、唯姫は何と応えただろうか?

——『まあ、英ヶ野上層部はだいぶごたついてるつて感じはしましたね。なんせ、英ヶ野女学校で殺人事件なんて十年来ですから』

唯姫の話によれば、呪いのスポットは十年前の殺人事件からそう呼ばはじめたらしい。その事件というものを調べれば、少しほ手掛かりになるだろうか?

可能性は薄いが、過去の事件と今回の事件が繋がっている可能性だつて否定はできない。いや――

(唯姫は呪いのスポットについて詮索されることに対し、強い拒絶反応を示した。彼女が事件に関わっている可能性は――!?)

…………おかしい。事件が起こったのは十年前――つまり、私が七歳の頃だ。当たり前の話だが、そのときの唯姫は英ヶ野に在籍などしていない。

分からぬ。私には呪いのスポットに関する情報が一切無い。十年前の事件の概要も、唯姫との関係も。

(調べてみる価値は十分にある……か)

唯姫とは別で行動して自ら情報を手に入れよう――そう決意し、ゆっくりと目を開く。鏡に映つた私の姿がぼんやり目にに入る。熱風にあてられ続けていた輝くような銀髪は、とうに乾ききつていたようだ。慌ててドライヤーを冷風に切り替え、毛の先まで冷やしていく。

「――はあ」

もう一度溜息をつき直し、ドライヤーの電源を切る。その空間に残つたのは微かな換気扇の音。その静けさから逃れるように、重い椅子から軽い腰をあげた。袖を通した制服は脱ぐ前よりも、この小さな身体にすっしりとのしかかつていて感じる。

(とりあえず、外に出ようかな)

今は夜風にあたつて涼みたい気分だ。それに、そろそろ閉館してもおかしくない時間だろう。流石にそろそろ出なければなるまい。

そうして足早に外へ出ると、先程まで晴れ渡つていた深闇の空が、鈍色の雲に覆われはじめていた――

【十月一日木曜日午後十時五分 茅ノ間唯姫の自室】

「入りますよ」

唯姫の部屋の前まで戻ってきた私は、扉をコンコンと二回叩き、部

屋の中へと声を掛けた。

「…………」

——ある程度予想はついていたが、やはり返事は無い。

扉を開けてみるものの、そこには誰も居なかつた。やはり唯姫は既に校舎へと向かい始めてしまつたのだろうか？

部屋に戻つてきた形跡は——特に無いように思えるが、戻つていた可能性は否定できない。

唯姫が校舎へ向かつてゐるのだとしたら、その移動手段は自転車か、はたまた別の乗り物か。何にせよ、歩いていこうと考えられる距離ではない。

バスで来た私が校舎へ向かうには、徒步以外の選択肢が残されていない。今から唯姫に追いつくことなど到底叶わないだろう。

可能であれば唯姫から目を離すことはしたくなかったが、こうなつてしまつたものは仕方が無いと割り切ろう。それに、この部屋についても気になる事は山ほど残されている。今、無理に彼女を追う必要はない……と、思う。

(もつと調べられるところはあるかな)

唯姫の影が消えた部屋の中を改めて見渡す。

(あの写真……映つてているのは、やっぱり唯姫じやない……?)

よくよく見れば、唯姫のような唯姫でないような、もしかしたら似ているだけの人物なのかも知れない。

(いや、そんな筈はないか)

唯姫の自室にある写真だ、全く関係のない人物の写真なんて飾らないだろう。しかし、この写真は十年前に撮影されたものらしい。だとすると――

(……あれ、十年前つて――――)

――十年前の事件。

ふと、脳裏にその言葉が思い浮かぶ。

先程から、身体の芯から冷えていくような、得体の知れない寒気を

感じている。

(十年前の写真に十年前の事件。考えられることは……)

写真に映つているのが唯姫ではないとすると、似たような誰かかも
しない。親かもしないし、姉妹の線だつてある。

(―――つ！ もしかして……)

そして、ある一つの仮説へと辿り着く。

実は、唯姫には姉が居たのかもしれない。その姉が十年前の事件に巻き込まれ、命を落とした。姉の面影を無くさないように、今でも昔の写真を飾り続いている――というのはどうだろう？

唯姫が『呪いのスポット』という呼び名に対して批判的であつた事についても、これなら説明がつく。

決定づける証拠などは何も無いが、全く考えられない話ではない。今のところは明確な矛盾も思い浮かばない。

(でも)

ある程度筋の通つた仮説を建てられて気分の良くなつたところで
思い直す。

写真がどのようなものかと分かつたところで、今の事件の何が解決するという話ではなかつた。それに、これはただの仮説だ。正しいと証明するための手段など私は持ち合はせていない。

んん～つ！ふう……

身体の中に潜む異物感を吐き出すかのように、深々と息をした。これは溜息ではなく深呼吸だ。力が抜けた腰を、唯姫が座っていた勉強机の椅子に下ろす。

さて、一旦状況を整理しよう。

十月一日午前十一時以降、英ヶ野女學校の寮棟二年棟敷地内にて殺人事件が起きた。犯人は未だに見つかっていないらしい。そして私は今、頓宮教導官に目をつけられている。殺人犯として疑われているということだ。

一番の謎である茅ノ間唯姫は、何故かは分からぬが私の味方をし

いてくれる。

——ただ、彼女にも不可解な行動は多々ある。

一番初めに今日の行動の予定を尋ねたとき、唯姫は『明日になつたら探しを入れる』と応えていた。しかし、温泉で再度尋ねたときは『この後校舎に行く』と応えていた。その言葉通りであれば、彼女は今校舎へと向かっている最中だよう。

唯姫の考えを変えたような何かがあつたとしたら——勘解由なからの電話が真っ先に思い当たる。頓宮教導官の名前が出たときから、唯姫の表情は明らかに変わっていた。頓宮教導官と唯姫の間には、絶対に何かしらの繋がりがある筈だ。

その繋がりが何かは分からぬ。特段仲がいいといったような話も聞いた事が無いし、かと言つて仲が悪いという話も聞いていない。

——そもそも、唯姫は本当に私の味方をしているのだろうか……?

もし味方でなかつたとしたら、私を裏切るパターンなどいくらでも思い浮かぶ。寝ている間に私を突き出すかもしれないし——唯姫が殺人犯で、私を利用しているのかもしれない。

(――つ!)

何故、今までこの可能性を考慮していなかつたのだろう。

唯姫が殺人犯である可能性だつて全く有り得ない話じやない。何故私を傍においておくかなどの様々な疑問はあるが、否定はできない。

一番分からぬのは、唯姫の動機についてだ。勿論、分からぬのはそれだけではない。裏では私の知り得ない何かが大きく動いているのだろう。

結局、私は何か考えるだけ無駄だということだろうか？ 唯姫のいなりになれば事は解決してくれるのだろうか？

——認めたくない。

私のこれからは、私が決める。今置かれたこの現状は、今まで行動を怠ってきた分のツケなのかもしれない。そうだとしたら、そのツケは今ここで返さなければいけないのだろう。

ゆっくりと椅子から立ち上がり、床に置いたリュックに手をかける。

ポツ、ポツツ——耳を澄ませてみれば、雨の滴るような音が部屋の外から聞こえてきた。

N14—1 京極澪のようなにか

【十月一日木曜日午後十時四十五分 学生寮 勘解由ななの自室】
「ねー、明日からどうする？」

後ろから掛けられた声に反応し、シャーペンを動かしていた手を止める。振り向いてみれば、私のルームメイト——眺夢ノ原工ナが、二段ベッドの上段から身を乗り出し、こちらをじんまりと見下ろしていた。

「ん？ どうするつて？」

「明日からずっと暇になるよね。外にも出れないし、あ～どうしよう……」

いつも思うが、彼女の声は随分と気が抜けている。

「それなら勉強しなよ。エナだつて進学するつもりなんだよね？」

「そんなコト言つたっけ、覚えてないや。勉強だけはしたくない」

「まつたく……まあたつぶり時間はできただけどね」

——『時間ができた』。そう、久々の休暇だ。といつても、例の事件のせいで休講になつちやつただけなんだけど。

「そうそう、せつかくの休みなのに、勉強ばっかりだと疲れるよ。なだつて、もつと休んだらどう？」

「私はしつかり休んでるよ。エナはちょっと休みすぎじゃない？」

「あたしだつて、いつつも動き回つてるよ。なんなら休み足りないくらいだよ」

休む時間が出来るのは嬉しいことだ。でも、休講といつても完全な休みになるワケじやない。私たちにはリリイとしての責務——ヒュージの討伐の当番がある。

ヒュージが出現したとあらば、当番のリリイが出動しなければいけない。

「そういうええさ、エナの当番はいつだつけ？」

「あたしは金曜日だよ。うーん、ななは大変だよね。メイゾールのメンバーだからいつつも出動してて」

「そんな事ないよ。まあ、ちょっと大変な先輩はいるけど……」

そんな会話をしていると、携帯がピピッピピッ……と鳴り出した。

「ななの携帯？？」

「うん、ちょっと外出てくるね」

「はーい」

着信は——ちょっと大変な先輩からだつた。

(澪様の方から電話だなんて珍しい……)

いつも通りさつと移動してサンダルを履き、扉を開けて外に出る。手に持つた携帯は細かく震えている。

「はい、勘解由ななです」

そして、電話を耳にあてたまま談話室へと移動する。

『——ん——て——い』

「はい？ あれ、澪様？」

澪様の声が微かに聞こえる——が、それ以上に大きいノイズが声を邪魔してくる。

『——です——て——さい』

「澪様、なんか声が聞き取りにくいです」

『——お願いです、助けてください』

(——つ!!)

ノイズが晴れ、聞こえてきたのは助けを求める澪様の声だつた。

「どうしたんですか!?」

『すみません、電波のいい所に移動しました』

「助けてください……」

『勘解由さん、お願ひがあります。どうか、私を助けてください。厚かましいということは分かつてます。でも、今の私は勘解由さんに頼るしかありません』

澪様の声は落ち着いている……ようと思えるが、いつもより口調が走っている。相當に焦っているのかもしれない。

『助けてくださいだけじゃ分かりません！ 何があつたんですか！？』

『少しだけ説明が長くなります。一から説明するので、聞いてください』

い

——こうして、澪様は語り始めた。

『事情があつて、茅ノ間唯姫さんの自室付近にいます。なので、私がそちらへ向かうことが出来ないことを前置きしておきます』

「まだ海岸の方にいるんですか！？」

『落ち着いて聞いてください。そして今、私は殺人事件の容疑者として第一候補に挙げられているそうです』

「えっ……」

殺人事件の——容疑者。すなわち、殺人者。本当に澪様が疑われているのだろうか？

『これは茅ノ間さんからの情報です。確証はありません』

『どうしてここで、茅ノ間唯姫の名前が出てきているのだろうか？』

『——彼女の話によれば、頓宮教導官が私を疑っているとのことでした。茅ノ間さんは私を助けてくれる——と言つてはいましたが、正直信用なりません。しかし、茅ノ間さんを頼るしかないというのもまた事実です』

「澪様、待ってください」

『何でしようか？』

「さつきから茅ノ間さん茅ノ間さんって言つてますけど、どうしてそこまで唯姫さんのこと信じてるんですけど、どうしてそ

『どうして……？』

「冷静に考えてみてください。そんな突飛な話、まず信用出来なくて当然じゃないですか」

『信用はしていません。ただ、有り得ない話ではありませんし、仮に本当だつた場合の危険が…………』

―――一体何を馬鹿げたことを言つているのだろうか、澪様は現実的に考えたら有り得ない話だろう。

「だつて、考えてみてください。ただの一生徒に過ぎない唯姫さんに、そんな行動力があると思いますか？　しかも、私たちも知らない事件に関する話を知つてるなんて。明らかにおかしいですよ」

『…………茅ノ間さんとのやり取りについては後で会つて話します。電話口で話しても明確に伝わりませんから』

話を聞いてみれば聞いてみるほど、変な違和感だけが積もつていく。

「私も百パーセント否定するワケじやないんですけど、唯姫さんの戯言かもしけれませんよね？」

『ええ、そうですね』

（なにか、おかしい気がする。いつもの澪様じやないというか――
――そうだ、言つてることと行動が乖離してゐるような感じ）

いつもの澪様なら、他人の言うことに耳を貸すことなんて、無い。
「…………まあいいです。それで、私は何をすればいいんですか？」

『そうですね、ここからが私のお願ひです。勘解由さんには茅ノ間さんの“尾行”を頼みたいのです』

「えつ…………」

『ちようど今、茅ノ間さんが英ヶ野の敷地へと向かつてゐる筈です。多分2年棟へと向かうでしょう、そこでバレないように隠れながら彼女の動向を見ていてください』

なんとも不確定な指示だ。澪様らしくもない――――なんて思つてしまふのは、果たして私の感覚がおかしいからなのだろうか？
「来なかつたらどうするんですか？」

『絶対に来ます。私を信じてください』

(今、世界で一番信用できないのが澪様――貴女なんんですけど)
「自信満々に言われても困ります。まずは自分の行いを振り返つてみてください」

『振り返りました。私を信じてください』

「今のはどう考えても振り返ってる間の長さじゃないです！ ちゃん
と振り返つてください！』

『…………』

『…………振り返りました』

「本当ですか？』

『本當です』

「はあ……今回だけですよ？ もうこんな頼み事なんて聞きましたか
らね？」

『それは困ります』

「じゃあ今回も聞かないです!!』

『やつぱり困りません』

まつたく澪様は――やれやれと思いつつも、いつもの澪様の調
子が戻つてきていることに、少しだけホツとする。

「はあ……それで、私は今から唯姫さんを監視しに行けばいいんです
よね？」

『はい。念の為携帯を持つて、いつでも連絡を取れる体制でお願いし
ます。時間的にはもう茅ノ間さんが到着する頃でしょう、そろそろ通
話を切れます』

「なんでこんなことになつたのかは後で詳しく聞きますからね！」
『はい。それでは切れますね』

プチツ――ツー、ツー……

澪様に問い合わせたいことは沢山ある。納得いかないことも沢山あ
る。でも――

(もう、なるようになれ……か)

携帯をパジャマのポケットにしまい、そのまま自分の部屋へと戻

る。廊下に人気は一切なく、今が夜中であることを嫌でも認識させられてしまう。

ゆっくりと自室の扉を開ければ、エナが眠たそうに声を掛けた。

「おかえり。誰から？」

「澪様から。ちょっと用事が出来ちゃつたから、もつかい外出てくるね」

「大変だねえ、いつも」

「あはは……それじゃ、行つてくるね」

「はーい気をつけて。あつ……」

「ん？ どうしたの？」

「……いや、何でもないよ」

「そう……」

なんとも締まらない挨拶をし、サンダルからスニーカーに履き替えそのまま自室を後にした。

ふと廊下の窓を見ると、蛍光灯の光で自分の顔が鏡のように映し出されている。それは、いつも通りのようで、どこか寂しげな表情だ。

（澪様……）

大丈夫、何事も無いハズだ。そう頭の中で繰り返しながらも、拭いきれない不安は大きくなっていく一方だった――

M14—2　とけない記憶

——暗い。

辺りの景色が、何も見えない。
家を出る前まで月明かりで照らされていた天球は、次第に翳りはじめ、今では星の一つも浮かんでいない。
自転車を漕ぎ続いているその足は疲労でどんどん鈍くなり、家を出たときに比べて進むスピードが落ちている。

「ははは……」

「大丈夫、私は何も間違つてない……よね」

虚空を見上げ、何度も何度も確認する。私の記憶に間違いなんて、絶対に無いんだ。

昔も——今も。

「——こういうのを“運命”っていうのかな？」

忘れた事なんて一度もない。

思い出さない日なんて一日もない。

現実は後ろから見張つてくる。

悪い夢は——

「ふふつ…………なんでこんなコトになっちゃったのかなあ」

私のせい？ 私のせいなの？

いや、違う。違うと信じたい。

私は悪くなんかない。悪いのは——

——あれ、誰が悪いんだろう？

今回の出来事、誰が澪様をこんな目に遭わせたの……？ 誰も澪様

を傷つけちゃいけないのに……

ああ、そうだ。悪いのは犯人だ。
何も迷うことなんてなかつた。
私が犯人を見つけ出して……

——この手で消してしまえばいいんだ。

なあんて。そんな簡単な話なら、今更こんなコトにはなつてないさ。ホント、どうすればいいのかなあ。私にはもうわからないよ。
ああ、なんだか肌寒いけれど、疲れた身体には夜風が気持ちよく感じる。

そういうえば、今日の天気は曇のち雨だつたつけ。結局雨は降らなかつたけど、カツパでも持つてくるべきだつたかもしれないね。

(あれは……)

よく目を凝らしてみると、道の先に灯る、二つの光があった。

(パトカー?)

気がつけば、その光は私の方へと近づいて——そして、私の目の前で止まつた。

黒と白で塗られたその車体は、間違いない警察の車だ。どうやら運の悪い時間に出会つてしまつたようで、止まつた車から二人の警官が出てきた。

「キミ、学生?」

どうやら、今から私は職務質問されるらしい。

「はい。学生です」

「今は一人なのかな?」

「はい」

私に話しかけてきた警官は、ここではあまり見かけない婦警だ。いや——そもそも警官に会うことが少ないから、珍しいかどうかも分からぬ。

「どこから来たの？」

「大山からです」

「帰る途中？ それとも用事でもあるのかな？」

「えつと、おばあちゃん家に行く途中なんです。容態が悪くなつたらすぐ来て欲しいって……」

少し焦つてる様な口ぶりをしてみる。こういうのは雰囲気で乗り切るものだ。

「んーとね、一応未成年は、夜十時以降の一人での外出はダメつてなつてるんだよね」

「ごめんなさい……」

「身分証明書はある？」

「あつ……急いで来たから財布とか持つてきてないんです」

「んく……まあ、ホントはダメなことだから、今後は気をつけてね」

「はい……」

……意外とあつさり引き返してくれたものだ。警官二人はそのまま車へと戻つていった。それっぽい雰囲気出してれば、何とかなつてくれるものだね。

止まつてたパトカーを横目に、自転車にまたがりペダルを漕ぎ始める。

少し進んだところで後ろを振り向いてみると、パトカーはもう居なかつた。追つてくることはないようだ。

予想外の出来事で立ち止まつてしまつたものの、こんな所で時間をくつているワケにはいかない。本校舎まで急がなきや。

…………目的地まではあと少し。